

學 報

Kobe College Bulletin

ISSN0389-164X

NO. 176

2016. 3. 11

神戸女学院

学報委員会

リベラルアーツ教育の一層の充実を目指して

中学部・高等学部 部長 林 真理子

2015年度は神戸女学院の創立140周年、太平洋戦争終結後70年という節目の年でした。節目は初心に戻って原点を確認し、その上で新たなビジョンを構築するときです。中高部の原点を見直しますと、津上智実先生編の「山本通時代の神戸女学院」の中で飯謙先生が記しておられますように、“non sibi”（ラテン語で「自分のために、ではなく」の意味）の精神で互いに仕え合うことを目指し、アメリカと日本の多くのキリスト者が祈りを合わせ、献金を捧げてくださったことによって創立されたことが確認できます。そして、タルカット・ダッドレー両創立者の後を継がれ、第2代校長となられたクラークソン先生がスタートさせた新カリキュラムでは、国語、文法や作文などを講ずる英語、植物学をはじめとする科学、幾何学や代数、音楽や器楽、体操、図画、裁縫、聖書など多彩な分野の授業が展開されていたことや、1882年の第1期卒業生全員が英語で卒論を朗読したという事実が確認できます。つまり、アメリカのリベラルアーツ・カレッジで展開されていたリベラルアーツ教育をモデルに、幅広い知識と教養、高い語学力、柔軟で創造的な考え、隣人に奉仕する志を持つ、自立した女性の育成を目標とすることが神戸女学院の原点なのです。

2015年は、中高部在校生や卒業生の活躍からこのリベラルアーツ教育の成果を再認識するとともに、その魅力をさらに深めるべく、新しい取り組みを始めた一年でもありました。その例として、総合学習の取り組み（中高部では「探究」と呼んでいます）が年々活発になっています。J1ではビブリオバトルで生徒たちが自分の推薦する書籍について熱弁を



ふるいましたし、神戸女学院の歴史や文化について調べ、理解を深める機会も持ちました。上級学年では研究テーマを自分で決め、コンピューター室や図書室で各自が探究し、レポートにまとめ、発表します。研究テーマの幅が高等数学・科学から文学や美術や音楽・舞台芸術・歴史や公民・食物まで年々広がっています。長期休暇を利用してフィールドワークをしたり、学外の識者に手紙でアンケート協力の依頼をしたりといった意欲的な取り組みも増えてきました。神戸女学院の建物や自然、歴史についての探究にも優れた発表が見られました。その結果、礼

拝時に実施される優秀作の発表も年を追うごとに聞きごたえのあるものになってきています。

また、リベラルアーツ教育の根幹である“commitment・engagement”（参加・関与）の体験をめざし、女子のリーダーシップについて英語で討論し、深めた考えを社会活動へ発展させる企画「エンパワメントプログラム」も昨夏からスタートし、39名の生徒が貴重な学びの5日間を持ちました。

国際哲学オリンピック、ヨーロッパ女子数学オリンピック、数学甲子園、理科甲子園、各種英語弁論大会、模擬国連、書道コンクール、アプリ甲子園、スポーツ競技大会など、多様な分野で、日ごろ鍛えた技や深めた考えを校外に発表し、柔軟な発想やコミュニケーション力、観察眼や分析力などを駆使して素晴らしい成績を上げる在校生も年々増えています。

卒業生の中には、理系学部に進学し、研究する傍ら、作家や音楽家としても活躍している方や、大学卒業後結婚され、子育てが一段落してから、他分野での夢を果たすべく再度大学で学ばれ、専門家として活躍されている方、発展途上国で専門知識や技能を駆使して、困難に直面している人々を支援する活動をしておられる方も多数おられます。女性進出の少ない分野でパイオニアとして注目されておられる方もいらっしゃると思います。神様の呼びかけに応え、隣人への奉仕という使命を果たすべく、ベストを尽くす神戸女学院生の矜持が140年間変わることなく脈々と続いていることに大いに励まされ、さらなる前進への決意を固めております。

2014年12月に中央教育審議会が42年ぶりに大規模の高大接続改革、すなわち大学入試制度改革を実施することを決め、2020年実施分からセンター試験に代わる新たな「高等学校基礎学力テスト（仮称）」や「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を実施すると文部科学大臣に答申しました。この答申は、実質上「高校出口改革」であると言われています。つまり高校生に、従来通りの「知識・技能」に加えて、「思考力・判断力・表現力」「主体性」の習得を求め、大学入試では「知識・技能」に加えて、「知識・技能

を活用する力」「思考力・表現力」を問うという改革です。センター試験のようなマークシート方式だけではなく、記述式の問題も加えるとも言われています。その結果、例えば英語では自由英作文や意見を述べさせる問題が出題されるとか、TOEFL等の民間の資格・検定試験の活用を検討するとか言われています。理科等では、英語の論文を利用したりする教科横断型の出題が検討されているそうですし、実験レポートやディベート形式等の出題もあるかもしれないと言われています。克服しなければならぬ様々な問題点が指摘されているので、新形式のテストが実現するまでには紆余曲折があると思われますが、現J1以下の生徒・保護者・教育関係者は、今後の中学・高等学校での教育内容に高い関心を持ち、様々な推測や議論を始めています。中学高等学校の中には、「今までの教え方を大きく転換しなければいけないのではないか？」という不安を持つ学校もあると聞いています。

しかし、改革の主眼が暗記中心の現試験制度から、自ら問題提起し、多角的に考えを発展させ、答えを導き出すという自発的かつ主体的な思考力や判断力、表現力の重視に変えるということですから、まさに神戸女学院中高部で創立以来ずっと実践してきたリベラルアーツ教育の真価が中央教育審議会のお墨付きを頂いたと自負しております。評価についても、教科横断的に知識や技能を駆使して課題を発見し、解決に向けて探求し、成果等を表現する力を評価するというものですから、本校で長年実施している「探究」の評価法そのものです。本校の教育理念への注目は、2年連続の中学入試の志願者増でも可視化できたのではないかと思います。

将来について確固たるビジョンを持ち、才能や教育で培った力を、神様の呼びかけに応じて隣人への奉仕に用いることのできる資質、すなわち確かな学力、健やかな身体と心、愛神愛隣を兼ね備えた女性の育成を不変の理念として、中高部全校で、さらに教育内容を充実させるべく取り組んでいきたいと存じます。

KCCだより

[Kobe College Corporation (KCC) was established in 1920 in Chicago, Illinois, as a non-profit organization by a group of Christian philanthropists. Its original purpose was to provide financial support for the relocation of the Kobe College campus from Kobe to Nishinomiya. Ever since, KCC has been a strong supporter of the school, both materially and spiritually, creating opportunities for cross-cultural educational experiences for students and teachers. In 2004, the organization added “Japan Education Exchange” to its original name as its activities expanded beyond support for the school. Kobe College has benefited greatly from the generous support of KCC-JEE for many years.]

Gottschalk Teacher of English Recruitment

KCC-JEE Board of Directors

Chair of the Recruitment Committee

Fumiyo Young



Having spent my early childhood years on Okadayama among the missionaries on campus, and having studied English under Miss Angie Crew and other Missionary teachers as a Kobe Jogakuin Junior and Senior High School (KCHS)

student, I was happy to receive an invitation in 2005 to assist with the English teacher recruitment efforts here in the United States for my alma mater. While I had been aware of KCC-JEE’s existence over the years, this was my first personal encounter with the organization and its programs as well. Since then, I have had the privilege of serving in various capacity as a KCC-JEE Board member. Teacher Recruitment continues to be the KCC-JEE program closest to my heart, however.

KCC had assisted the Mission Board with recruitment of the Missionary teachers since the 1950’s. Initially, two teachers were sent to KCHS for 3-year terms. Over the years, the number of

Missionary teachers was increased to three, and to four by the 1980’s. KCC and Kobe Jogakuin made an agreement at that time, to share the salary and other expenses to support the four Missionary teachers. In the early 2000’s, as the Mission Board was closing down its operation, then KCC president Patsy Gottschalk and Kobe Jogakuin finalized the financial and work share agreement to recruit and support four native-speaking English teachers at KCHS. The Missionary teachers, as they were called until 2004, now hold the position as Gottschalk teachers of English, so named after the former KCC president and Missionary Teacher from 1959 to 1962, “Cooper Sensei” to her students then.

The recruitment begins in early June with announcements sent out electronically to select teacher recruitment websites, international job boards, job boards at select universities’ websites, etc. Typically, 60 to 80 applications are submitted by mid-July. The committee members study the applications, and as a group, select a few finalists whom we invite to meet with us for in-person interviews in late August. The results of the interviews are reported to Kobe Jogakuin for their review and hiring decision.

The recruitment committee strives to fairly and thoroughly evaluate the applicants for their skill level and style as teachers. At the same time, we must look at the whole persons and how well they might fit in with Kobe Jogakuin and its culture. A Gottschalk teacher is an ambassador of the Western culture. A Gottschalk teacher is expected to uphold the Christian values upon which Kobe Jogakuin was founded. We are constantly looking for ways to improve our evaluation process to gain better understanding of the applicants. For example, the finalists are asked to prepare and present classroom demonstrations during the interviews. This exercise has helped with the evaluation of the applicants’ teaching skills.

The tradition of excellence in educating young women remains strong at Kobe Jogakuin 140 years since its founding, and nowhere is it as evident as in the KCHS English Department. I am honored and proud to play a part in the continued success of the unique English education at KCHS.

[コーベ・カレッジ・コーポレーション (Kobe College Corporation) は、1920年に神戸女学院のキャンパス移転の資金援助のために設立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体(NPO)です。以来、日米両国の学生生徒ならびに教員のために、さまざまな文化交流の機会を創出するなど、有形無形の力強い支援を行い、神戸女学院はその活動によって大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCCはその活動範囲を拡大するために、名前の後に“Japan Education Exchange”という副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。今回、英語と日本語の両方で執筆をしてくださったのは、中高部英語教員募集委員会委員長のヤング史代さんです。ヤングさんは中高部で書道を教えていらした酒井操先生のお嬢様で、先生が第二次世界大戦後に寄寓していらした元の同窓会館、この岡田山でお生まれになりました。本学院中高部からオハイオ州ディファイアンス大学へ進まれ、キリスト教教育および社会福祉を専攻、卒業後はソーシャルワーカーとして活躍されました。]

中高部英語教員 (Gottschalk Teachers) の募集

KCC-JEE 理事

中高部英語教員募集委員会委員長

ヤング 史代

私はキャンパス内にお住まいになっていた宣教師の先生たちと共に岡田山で少女時代を過ごし、長じては神戸女学院中高部で、アンジー・クルー先生をはじめとする宣教師の先生たちから英語を教えてくださいました。ですから、2005年に米国における母校神戸女学院の英語教員募集のお手伝いを頼まれた時、喜んでお引き受けしました。KCC-JEE という名前だけは知っていた組織およびその活動と、私はこのようにして関わりを持つようになったのです。以来、KCC-JEE の理事としていろいろな仕事に携わる機会に恵まれてきましたが、中でもいちばん深く関わっているのは、教員募集の仕事です。

KCC は、1950年代から、宣教団体 (1961年まではアメリカン・ボード American Board of Commissioners for Foreign Missions、以後は米国合同世界宣教委員会 United Church Board for World Ministries) が神戸女学院に派遣する宣教師の選択に加わっていました。最初は、2名の宣教師が3年

契約で派遣されていました。その後、宣教師の人数は3名に増やされ、更に1980年代には、4名になりました。KCC と神戸女学院が宣教師の人件費を共同で負担するという同意書が作成されたのもこの頃でした。2000年代に入って、宣教師の確保が困難になったことに伴い、当時のパッツィー・ガチョック KCC 会長と神戸女学院との間で、英語を母国語とする教員4名を募集し雇用するための費用と役割の分担が決定されました。2004年までミッションナリー教員と呼ばれていた先生たちは、以後、中高部英語教員となりました。(英語名は、1959年から1962年まで神戸女学院のミッションナリー教員をつとめ、生徒たちに「クーパー先生」として親しまれていたガチョック元会長にちなんで、ガチョック・ティーチャーズとなっています。)

中高部英語教員の募集は、6月上旬に求人広告を教員募集サイト、海外求人情報のサイト、そして選別した大学の求人情報サイトなど、各種のウェブサイト上に発行することから始まります。7月中旬には例年60人から80人くらいから応募書類が提出されます。委員会のメンバーはまずそれぞれで書類審査を行い、次に委員会を開催して“最終応募者”となる数人を選択し、8月下旬に面接を行ないます。委員会の最後の仕事は、面接の報告書を作成して、採用人事の資料として神戸女学院に送ることです。

教員募集委員会が腐心しているのは、応募者の教師としての水準や個性をしっかりと総合的に評価することです。同時に、人柄や神戸女学院との相性を見きわめることも大切にしています。ガチョック・ティーチャーは西洋文化の伝達者であり、キリスト教主義教育を建学の精神とする神戸女学院の精神的なリーダーとなることを期待されているからです。私たちは、応募者をよりよく理解するために、常に選考方法の改善を心がけています。英語の模擬授業を行うことを面接のプログラムに加えることにしたのも、その一例です。実演を見ることで、教師としての資質がより確実に評価ができるようになりました。

創立から140年を経た今も、神戸女学院では、中高部英語科の英語教育に顕著に見られるように、素晴らしい女子教育の伝統がしっかりと受け継がれています。このユニークな英語教育に、募集を通じてささやかな貢献が出来ることをありがたく、また誇りに思っています。

図書館本館に貴重書庫設置

神戸女学院図書館には、オルチン・コレクションをはじめとする明治初期キリスト教関係資料ほか、140年にわたる学院の歴史を物語る貴重な資料を多数所蔵しております。残念ながら、これらの資料の中には劣化が著しいものが多く、早急な保管環境改善の必要が生じておりました。

おりしも2012年、めぐみ会東京支部史作成に図書館が協力させていただいたことをきっかけに、同支部所属のめぐみ会員のみなさまより、貴重書庫設置を目的とするご寄付を賜ることとなりました。さらに、Kobe College Corporationより岡田山キャンパス80周年記念事業にと提供された資金を貴重書庫設置にあててはどうかとの提案を学院からいただき、これをうけて大学図書館委員会において具体案を検討、図書館本館事務室を改装して貴重書庫を設置するという案を進めることに決定いたしました。

その後、2014年に図書館本館が重要文化財に指定され、計画を再考しなければならない可能性が生じ、設置事業が遅延いたしました。が、最終的に当初の計画通りに設置を進められることとなり、2015年度の事業として実施に至りました。

貴重書庫への改装工事は2015年8月末に竣工、書庫内設備の設置や環境調査を経て、12月7日に図書館本館ロビーにおいて開設式が執り行われました。ご寄付を賜りましためぐみ会のみなさまはじめ関係者30余名のご列席のもと、飯謙学院チャプレンの司式により式を挙行、その後、完成した貴重書庫をご覧いただきました。

図書館では、貴重書庫の設置が多くのの方々、特に同窓生のみなさまの学院に寄せる思いに支えられて実現したことを覚え、貴重な資料の保全と利用に最善をつくして参ります。

(図書館課長)



完成した貴重書庫の内部

「神戸女学院古本募金」を開始しました

神戸女学院教育振興会では、兵庫県の私立学校では初の取り組みとなる「神戸女学院古本募金」を開始しました。

古本募金とは、在学生・保護者・卒業生・教職員等からご提供いただいた書籍ならびにDVD等をリサイクル業者が買取り、神戸女学院が寄付金として受領する仕組みです。

めぐみ会をはじめとした多くの方々へ支えられ、現在も本学院へのご寄付を通じた支援は活発に行われていますが、在学生・在校生や若手の卒業生であっても読み終えた本を通じて気軽に募金に参加できるようにすることで、神戸女学院の一員としてお互いに支えあう実感を持って欲しいとの思いから、この制度を開始しました。

募金の使途については「愛神愛隣の精神をもって支えあうことで、知の循環を図りたい」というコンセプトから、「学生生徒の奨学金の充実」のための基金に充当する予定です。

募集方法ですが、学内に設置した回収ボックス(写真)に投入するほか、自宅等に集荷(5冊以上で無料)も可能となっており、気軽にご参加いただけます。

2015年12月18日に開始し、1月末時点で188冊/4,746円のご芳志を賜りました。皆様のお気持ちにこたえるべく大切に活用させていただきます。

関係者はもちろん、地域や企業の方々などにもご参加いただくことで、地域に支えられ、開かれた学校づくりにこれからも取り組んでゆきたいと願っております。

学院およびめぐみ会ホームページに古本募金のご案内がありますので、ご覧ください。

(総務課)



古本募金 回収ボックス

クリスマス報告

〈大 学〉

世界中で悲惨なテロが起きている中、平和を祈りながらクリスマスの時期をむかえました。例年と同じくクリスマス前の一週間は各学科によるチャペルアワーをまもりました。演奏や合唱、心温まるクリスマスのエピソードをうかがうなど、それぞれ学科の特徴が表れたチャペルアワーとなりました。

クリスマス礼拝当日となる12月18日の金曜日は、授業の時間割を変更し、正午から大学クリスマス礼拝を皆でまもりました。夜に行われる学院公開クリスマス礼拝と同じく、音楽学部による演奏・合唱奉仕の中での讃美礼拝は、主イエスの誕生を祝い、敬虔な気持ちを思い起こします。今年は頌栄短期大学名誉教授の阿部恩先生に「神はあなたを見捨てない」と題してメッセージをいただきました。躓いたとき、困難にあったときには聖書を開けてごらん下さい。神さまは必ず導いて下さる。いつまでも神戸女学院の心を大切にするとお話しくださいました。

終了後には、出口において「美容式」[®] アミノ酸ゼリーのプレゼントが、院長先生や学長先生、宗教活動委員の先生方、学生ボランティアによって、出席した学生に配られました。これは神戸女学院大学人間科学部の高岡教授とドクターアミノ 大谷勝氏による神戸女学院発のゼリーです。皆で共にいただき、主イエス降誕の喜びを分かち合いました。

また、学生ボランティアには今年もクリスマス礼拝での舞台照明、受付のスタッフとして奉仕をしていただきました。

昨年に引き続き、会場のほのかな灯りの中、暗闇の中に灯る壇上の蠟燭の光に、キリストの生涯と福音を感じる大切なひと時となりました。



大学クリスマス礼拝

〈神戸女学院 公開クリスマス礼拝〉

学院全体でまもられる公開クリスマス礼拝は、今年で43年目をむかえました。

今年も、学院オルガニストの片桐聖子氏による前奏が講堂に響き渡り始まりを告げました。続いて、高等学部生徒によるハンドベル演奏、招詞、一同による讃美。会場の電気が消され、壇上の蠟燭の灯りだけがゆらめく中、音楽学部による演奏が会場を包みます。聖書が読まれ、中高部コーラス部による合唱。安森智司チャプレンから「美しい光」と題してメッセージをいただきました。どのような社会の暗闇においても、イエス様の光を求め続け、その光に照らされ一人一人を世に送り出し続けた神戸女学院。光に照らされながら、隣人と共に互いに照らし合う、調和的な光をになっていく者になれるようにと祈りを込められました。

再び音楽学部の演奏。音楽学部の中村健先生、Xavier Luck 先生に指揮をしていただき、オーケストラの演奏に心をゆだねるひと時が与えられました。そして一同で高らかにクリスマスの讃美歌を歌い上げ、最後に祝福をもってクリスマス礼拝は終わりました。長年に渡り指揮をして下さった中村先生は、16年3月に退職されます。最後に、先生へ感謝を込めた花束と共に盛大な拍手が送られました。

学院全体が大切にまもっているこのクリスマス礼拝は、神戸女学院がキリスト教主義学校であることを強く伝えられる大きな機会であり、また学院として共にひとつの祈りののときを持つことができる大切な場です。来場者数も約600人とほぼ満席で、皆様がこのひと時を変わりなくお覚え下さることを43年目の節目として改めて心に刻み、心より感謝申し上げます。

次年度以降も主の恵みに共に与かるひと時を、神戸女学院に連なる者として、一緒に過ごしていただけるよう祈るものです。

司式：中野 敬一 奨励：安森 智司
指揮・編曲：中村 健 指揮：Xavier Luck
合唱・管弦楽：神戸女学院大学音楽学部
ハンドベル・中高部コーラス指揮：喜多 牧子
奏楽：片桐 聖子

(チャプレン室)

〈プレゼント・献金報告〉

★施設へのプレゼント

今年も大阪水上隣保館（大阪府三島郡）と神戸真生塾（神戸市中央区）へプレゼントをお届けするこ

とができました。神戸真生塾には、J家庭科研究部による手作りの小物とS料理研究部が焼いた名前の入ったクッキーを合わせてプレゼントしております。

東日本大震災から始めた、福島にある社会福祉法人 牧人会（福島県西白河郡）の白河めぐみ学園と白河こひつじ学園にもプレゼントをお送りしました。

個人情報保護の問題もあり、続けていくことがなかなか困難な行事となってきましたが、誰かがあなたのことを思い、支えたいと思いを寄せているその気持ちだけでも子ども達に伝えることができるよう、これからも行っていきたいと思います。

今年は神戸真生塾には中高部自治会の方々、福島の2施設には中野チャプレン、大阪水上隣保館には中野チャプレン、チャプレン室職員 新さんが、サンタクロースの代表としてプレゼントを運んでくださいました。合わせて感謝と共に報告させていただきます。

個人情報保護のため、
一部削除しています。

皆様、ありがとうございました。

(チャプレン室)

〈中高部 クリスマス燭火讃美礼拝〉

12月16日、8時半から9時半という、日々の礼拝よりも長く充実した時間の中で、クリスマス燭火讃美礼拝を守りました。

このクリスマス燭火讃美礼拝のために、J・S宗教部、J・Sコーラス部、S3音楽選択受講者の生徒たちは礼拝の準備を重ねて来ました。中高部のクリスマス礼拝は、生徒たちの奉仕の業に支えられながら、クリスマスの物語を追うように、聖書と賛美を重ねてゆきます。

パイプオルガンの前奏、S3音楽選択受講者の生徒たちのハンドベル演奏に導かれながら礼拝が始まる時の講堂は、普段の灯りは無く、真っ暗です。賛美と共に入場する聖歌隊のJ・Sコーラス部の生徒たちの携えたロウソクの光が、とても美しく煌々と輝きます。

やがて、その光は、聖書の御言葉と賛美を重ねていく中でキリストの誕生の物語を迎え、キリストの光を象徴するクライストキャンドルに点火されます。

まさに、全身でクリスマスの出来事を吟味することのできるクリスマス燭火讃美礼拝を、全校生徒と共に守ることができました。

今年度は、飯謙学院チャプレンから、「羊飼いは神を賛美しながら帰って行った」と題しての奨励をいただきました。今年度の中高部クリスマス燭火礼拝は、ルカによる福音書のクリスマスの物語をベースに礼拝プログラムが構成されています。ルカによる福音書が伝える羊飼いの視点で語られた飯チャプレンの力強いメッセージは、まさにこの礼拝の中で、聖書と賛美と調和しつつ、心に響いてきました。

信仰・希望・愛を象徴するクライストキャンドルを、皆で共に心に灯しつつ、各自が持ち寄った献金を献げ、祈りを合わせました。このクリスマス燭火讃美礼拝を通して、今一度クリスマスの意味を考え、一人一人が神様に、隣人に期待されている役割について、思いを寄せることができたと感じています。

美しい音楽のご奉仕をくださった音楽選択受講者の皆さん、J・Sコーラス部の皆さん、J・S宗教部の皆さん、そしてメッセージをとりついでくださった飯学院チャプレンに心から感謝申し上げます。

(宗教部顧問)

2016年度年間標語

めいめい自分のことだけでなく、他人
のことにも注意を払いなさい。

(フィリピの信徒への手紙 2:4)

学院チャプレン 飯 謙

これは道徳の教科書にでも出てきそうな言葉ですが、1世紀の伝道者パウロの手紙に記されています。彼はこのテキストを「イエスにならう」という文脈に置きました。そのことがこの言葉を、聖書の言葉として特徴づけています。

「注意を払う」と訳された原典のギリシア語(スコペオー)は、新約に6回しか用例のない稀少語ですが、そのうちの5回がパウロの文書で使われており、彼が大切にしていたことが窺えます。どのような意味で大切にしていたのでしょうか。

「注意」という訳語から、この語は感情や感覚と結びつくと印象を受けますが、辞典によれば原義は視覚と関わります。しかも何となく「眺める」といった、気持ちのこもっていない目線ではなく、自分の行動原理となるところまで「一心に見つめる」ことで、「凝視」と訳してもよい言葉です。さらに言えば、イエスのように、自ら他者の傍らまで出かけていき、その人の喜ばしい側面を発見するようにとの勤めを含意します。パウロは、他者の立ち居振る舞いを模倣する没個人的な在り方や、相手の揚げ足取りの極意を教えているわけではありません。イエスの思いをそれぞれの場で活かすようにとの願いを、「注意を払う」という言葉に託したのです。

その意味で、この語はイエスが語った「アガペー」を言い換えていると申せます。アガペーは「愛」を意味するギリシア語ですが、類義語のエロース(自己のために自己を愛する)やフィリア(自己のために他者を愛する)とは異なり、他者のために他者を愛する、他者本位的な性格を特徴とします。

神戸女学院は昨年創立140周年を感謝し、150年に向けて歩みを進めています。「愛神愛隣」がますます成熟し、わたしたちの中で生き、また活かせるよう、祈りを合わせたく思います。



退職のことば

個人情報保護のため、9ページ目から
13ページ目は削除しています。

史料室の窓(39)

3つの記念式

— 天国への鍵 —

神戸女学院史料室 佐伯 裕加恵

昨年2015年、神戸女学院は創立140周年を迎え、次の歴史への第一歩を踏み出しました。

ところで、今から100年前の1916年3月29日にも神戸女学院では祝賀行事が盛大に執り行なわれていました。それは学院創立40周年記念式とソール名誉院長推戴式そしてデフォレスト院長就任式の3つを同時に挙げるというものでした。学校創立は1875年ですから、本来、学院創立40周年はその前年1915年のはずです。それなのにどうしてお祝いが1年伸びたのでしょうか。

それにはこんな事情がありました。1915年3月、ソール院長が公用で校門を出る時、乗っていた人力車が転覆して坐骨神経を痛め、帰国静養することになってしまったのです。先生は院長代理をデフォレスト先生に託して6月に帰国しました。そして9月に院長を辞してデフォレスト先生に院長職を譲ることにしました。そこで10月に行なうことにしていた創立40周年記念の諸行事を延期してソール先生の帰任を待って行なうことに決めたのです。そして同時に、ソール先生に名誉院長になっていただき、デフォレスト先生の院長就任も一緒に祝おうと考えました。ソール先生は1883年に来日以来、第3代校長・院長であったブラウン先生の右腕として神戸女学院における女子高等教育を誕生させ、ブラウン先生のあとを受けて第4代院長に就任。1899年の文部省訓令第12号を乗り越えて学校の高等教育機関としての確固たる基礎を築きあげ、神戸女学院の教育を充実させた功労者です。その院長在職は16年に及びました。

1916年7月30日発行の同窓会誌『めぐみ』第62号は40周年記念特集号となっていて、全94ページ中55ページを割いて式辞、記念文学会の様子、懐旧談を掲載しています。式典そのものについての記事はたったの2行「三月二十九日三十日に渡りて創立満四十年祝會を催す。」(p.65)としかありませんが、巻頭に置かれている4枚の写真のキャプションから式典の様子を伺い知ることができます。また、アメリカンボード日本伝道団発行の機関誌 *Japan Mission News* には式典の様子を伝える記事が掲載されてい



ケーリー博士から鍵を手渡されるデフォレスト先生

ます (April 1916)。

式場となった赤レンガの大講堂内の正面の大壁には前年度修了した第32回卒業生の寄付によって作られた学院標語の元になった聖句「爾心を尽し精神を尽し意を尽して主なる爾の神を愛すべし、己の如く爾の隣を愛すべし」(マタイによる福音書第22章34節-40節)が掲げられていました。その下でソール先生の名誉院長推戴式に続いて行なわれた院長就任式では、学院理事ケーリー博士がデフォレスト先生にブルーのリボンに結ばれた鍵を手渡すという象徴的なパフォーマンスが行なわれました。使徒ペテロがキリストから天国のカギを預かったように、院長にもこの学校に集う人々の導き手になる様にとの願いを込めて。この情景は多くの会衆に快い感銘を与えたといえます。

こうしてデフォレスト先生は5代目院長に就任し、以降1940年に病氣帰米によって退任するまで25年間院長として、ソール先生が充実させた教育をさらに発展させ、キャンパス移転を成し遂げ、女子大学を作り、今日の神戸女学院を築き上げていきます。

“... I feel that I want to work more earnestly than ever before for the building up of Christ's Kingdom here in this school...”

『めぐみ』に掲載されたソール先生の言葉です。

人 事

個人情報保護のため、
一部削除しています。

慶 弔

秋季公開講座報告と春季公開講座告知

2015年度の秋季公開講座は、11月に「戦後70年」というテーマで開催いたしました。

第1回（11月21日）は、「ひめゆりの70年」と題しまして、本学文学部総合文化学科の渡部充准教授にご講演いただきました。先の大戦末期に多くの犠牲を出し、「悲しい沖縄」の象徴の一つとなっているひめゆり学徒隊について、戦後どのように語られ、また、時に利用されたか、彼女たち自身は何を語ろうとしたのかを、戦後70年を振り返りながらお話いただきました。

第2回（11月28日）は、「象徴天皇制と戦争の記憶」と題しまして、本学文学部総合文化学科の河西秀哉准教授にご講演いただきました。敗戦後、天皇の戦争責任が国内外でさまざまに論じ続けられましたが、当時の昭和天皇は退位せず、日本国憲法によって「元首」から「象徴」に地位を変えて、そのまま天皇であり続けました。そのため常に戦争の記憶と向き合わざるをえなかった象徴天皇制の、現在に至るまでの、その歴史的過程についてお話いただきました。

参加者は2回合わせて延べ187名でした。今回の「戦後70年」というテーマは、いささか重いテーマかと思いましたが、2015年は節目の年でもあり、また、さまざまな動きのあった年でもありましたので、ここで改めて戦後の70年を振り返ることは意義のあることではないかと考えて選んだテーマでした。テーマが重いだけに、来場者数については少し不安に思っておりましたが、まずまずのご来場をいただけてほっと胸をなでおろしているところでございます。

なお、当初の予定では、12月5日に第3回として、本学名誉教授の内田樹先生に「戦争に負けるということ」と題してご講演いただく予定でしたが、直前に先生のご母様様がお逝去されたため、中止となりました。ご母様様の天上の平安をお祈りいたします。

さて、来年度春季の公開講座ですが、「国境を越えて」というテーマで、本年6月ごろに開催の予定です。詳細については、また改めて告知いたしますが、音楽学科教員による音楽会も企画中でございます。多数のご参加をお待ちしております。

(生涯教育委員長)

新刊紹介



石川康宏(総合文化学科教授) 編著

『社会のしくみのかじり方』

新日本出版社 2015年7月刊
192頁 1,620円(税込)

社会とは何かと問われると、答えに窮する。それは私たちにとって欠かせない概念であるにもかかわらず、根本的であるがゆえに説明しづらいのである。また現代の社会は、多岐にわたる現象を含み混んでいて単純ではない。これもまた、社会とは何かを答えるのを困難にしている。

本書『社会のしくみのかじり方』は、石川康宏先生がそうした社会のしくみ(=構造)をやさしい言葉で丁寧な解きほぐしたものである。非常に読みやすい。しかし議論は鋭く、本質をとらえている。

本書は主に二つの部に分かれている。Iが「あなたが学べば社会はよくなる!」。タイトルどおり、社会について学ぶことにどのような意味があるのか、実例を数多く交えながら論じている。学ぶことで「社会はよくなる」との希望は、反知性主義的な雰囲気をはびこる現代だからこそ、より響く主張ではないだろうか。

IIの「日本社会はどうなっている?」は、12の話題が論じられている。先生の専門の経済学から、現代の政治や外交、日本近現代史などが縦横無尽に展開され、多角的に「社会のしくみ」が明らかにされる。ゼミや学習会などで使用するテキストとしては打って付けの文章だろう。個人的には、本書で各テーマについて興味を持った読者が、次にどのような本を読んだらよいか、発展もしくは参考文献が挙がっていると、私たちが学ぶことの意味をより訴えることができたのではないかと思う。

石川先生が最後に論じている「未来の社会」に向けて、一人一人が学ぶことの重要性をぜひ本書から読み取りたい。ぜひ手に取ってほしい。

(総合文化学科准教授 河西 秀哉)

新刊紹介



津上智実(音楽学科教授) 編

『山本通時代の神戸女学院
黎明期の女子教育とその歩み』日本キリスト教団出版局 2015年9月刊
95頁 1,080円(税込)

本書は1995年から本学が設置してきた科目「初期神戸女学院」のテキスト(教科書)として編纂されたものである。この授業は複数の教員によるオムニバス形式によるもので、学生から好評を得てきたが、講義に相応しいテキスト作成を求める声も高まっており、それが出版の第一義的な要因となった。

テキストという性格上、様々な要望があったことは想像に難くない。資料分析に基づく正確な内容が求められるのは当然であるが、頁数には制約もあるので簡便なものが好ましく、必須情報の選択には頭を捻られたことだろう。しかも通底する思想や精神を伝えるには単なる出来事の記録では不十分である。だからといって冗長になつてはテキストに向かない。執筆者と編集者のご努力により、良質で理想的な読み物が出版されたことを心から感謝したい。

内容は、第1章が「キリスト教主義教育の礎」、第2章「初期の英語教育」、第3章「初期の音楽教育」、第4章「初期の体育教育」、そして第5章「初期の卒業生とめぐみ会」で、本学院の黎明期の教育と卒業生の活躍に焦点を当てながら、この学院の教育における特色が明確に紹介されている。

宣教師や当時の教師、あるいは生徒たちの言葉が効果的に引用されており、読後の記憶に余韻として残るのも本書の良さである。さらに写真や資料も豊富に掲載されており「飽きる」ことがない。小冊子ながら充実した内容は驚きに値する。語句解説も本文のすぐ上に掲載されており、読者への親切な心遣いも感じられる。

本書は講義テキストに留まらない。生徒、学生、卒業生、教職員をはじめ多くの方々に手にとって頂きたい。先達との時を超えた交流が与えられ、学ぶ(学んだ)誇りや励ましを得ることができよう。創立150周年への意識共有のために推薦できる一冊である。

(総合文化学科教授・大学チャプレン 中野 敬一)

新刊紹介



河西秀哉(総合文化学科准教授) 著

『皇居の近現代史
開かれた皇室像の誕生』吉川弘文館 2015年10月刊
227頁 1,836円(税込)

戦前「国ノ元首ニシテ統治権ヲ総覽」した天皇は、日本国憲法により「日本国の象徴であり日本国民統合の象徴」と規定された。天皇制自体の廃止もあり得る中、戦後の日本は「象徴天皇制」とすることで天皇制を維持した。しかし、天皇が国家を、あるいは国民の統合を象徴するとはどのようなことなのだろうか。戦後象徴天皇制の歩みは、日本国憲法制定段階で明確に定義されなかった象徴概念の内実を模索した歴史である。本書は皇居(宮城)の在り方から象徴天皇制の展開過程についてアプローチする。

戦時中、皇居は「聖なる空間」として遥拝され、国体論的な天皇制の下で「閉じ」られていた。戦後、皇居勤労奉仕の実施、遷都・宮城移転論争、皇居再建運動などを経る中で、国民と天皇の距離感を縮め、いかに象徴天皇制への支持につなげるかが図られた結果、皇居は「開かれ」ていく。皇居の開放には「開かれた皇室」という新たな天皇制イメージが重ね合わされた。その一方で、国民には「文化平和国家」たる「新生日本」の中心に天皇を位置付ける思想も存在し、国家の中心に天皇をおく戦前の上皇制と連続する側面もあった。本書は、皇居がまさに象徴天皇制を表象する空間であったことを、平易で簡潔な筆致で明確に論じる。皇居の開放は、宮内庁／マスメディア／天皇自身の意向に左右されつつ成し遂げられた。特に、天皇本人は象徴天皇制をどう内実化しようとしたのか。戦後70年を機に皇居内の御文庫附属庫が公開されたことは記憶に新しいが、吹上御苑の自然観察会、乾通り一般公開など、さらなる開放の方向性は、今上天皇の意向と無縁ではないだろう。本書は皇居の落成までを主たる対象とする。その後の過程—今上天皇と象徴天皇制の関係性について、ぜひ今後の分析を期待したい。

(総合文化学科専任講師 栗山 圭子)

新刊紹介

神戸学院大学文学部総合文化学科 監修
與那嶺司 編

『日常を拓く知 6 <支える>』

世界思想社 2016年1月刊
184頁 1,944円(税込)

支えるを考える

『日常を拓く知』とは、様々な専門を持つ文学部総合文化学科の教員が一緒になり、一つのテーマについて考えることを目的にしたシリーズである。これは、教員にとって、狭い範囲の研究を行う「バラバラ文」のスペシャリストではなく、様々な分野において貢献が出来る真の「総文」のジェネラリストであることを示す重要な役割を果たしているように思う。

シリーズの最後となる第6巻は『支える』というタイトルが付けられ、主に現代社会における「支える」のあり方を取り上げている。編集者は現場の経験も豊富な社会福祉学専門の與那嶺司准教授である。『支える』には、「『支える』を語る」の対話の記録、「『支える』を学ぶためのブックガイド」、そして、社会福祉学を始め、国際関係論、コミュニケーション論、アメリカ文学、日本語教育学、メディア論という6つの分野から「支える」に纏わる読み応えのあるエッセイが掲載されている。

特に、編集者が「はじめに」から指摘しているように「『支える』という行為にはネガティブな側面もあります。(p. iii)」という視点はこの書評の筆者にとって新鮮で刺激的であった。確かに、「支える」には「つかえる」(すなわち支障が出る)という読み方もある。例えば、與那嶺司准教授と北川将之准教授の対話から明らかになるように、健常者の価値観を押し付けようとするれば、陥穽に嵌ることが多い。「主体性」を大切にすることが必要であるという(pp. 52-53)。

村の単位でお互いを監視し合ったり、補い合ったりする社会の構造を失いつつある日本は、これらからなおざりにされている人々のためにどのような措置が必要か、それから障害者を含め、人がどのように自分の潜在能力を最大に開花させるかを考えるのは『支える』の意味なのではあるまいか。

(英文学科専任講師 Goran VAAGE)

CD 紹介



辻井 淳(音楽学科准教授)-ヴァイオリン-
藤井由美 -ピアノ-

『愛の歌』

OTAKEN RECORDS 2015年8月録音
3,445円(税込)

f字孔から溢れる文字の無い物語

下手の横好きとしてしか音楽と付き合ったことのない私のもとへ、何の間違いかからかCD評の依頼が舞い込んだ。私には及びないので、代わりに感想を素直に文字にしてみようと思う。

収録曲の一覧に目をやると、馴染みの無い作品が大半を占めていることに気づく。途端に、椀盛の蓋を今まさに開け、中に込められた魂を放とうとする瞬間に覚えるかのような高揚の矢に脳を突かれ鼓動がにわかに速まる。

最初はエネスクの譚詩。初めて聴く旋律に何故か郷愁をそそられ不覚にも感傷に溺れそうになる。静寂に漂う余韻を掻き消すように、ディニークの時計が狂おしく針を振り回す。何たる超絶技巧曲だろう。それをこんなに軽妙に易々と演奏してしまうヴィルトゥオーゾ、辻井先生の実技に驚嘆しつつ、そのまま最後の曲まで一気に聴いてしまった。

村の百姓娘を貴婦人ドゥルシネアとして称えるドン・キホーテの甘い哀求に酔う、アルフテルの夜曲。厳かなカデンツァに導かれてヤンキードゥドゥル(アルプス一万尺のメロディー)のバーレスクが展開する、ヴェータンの変奏曲。アメリカ人をしてフライドポテトをフレンチフライズならぬボム・フリットと呼ばしむるような茶番仕立ての小気味よさに顔がほころぶ。ポーランドの士族、シュラフタ達が冒頭ではその威容を保ちつつ控えめに、次第に茶目っ気を増しながら踊りに興ずる様子が目に浮かぶ、ミュザンのマズルカ。貴腐ワインの雫のように甘く濃密な愛の告白、スクによる愛の歌。

優美なヴィブラートの揺らぎ。伸びやかな響き。細く透き通ったり、太く唸ったり、艶っぽく粘ったり、可憐に弾んだり。七色の声で歌う辻井先生のヴァイオリンがピアノと織りなす綾の文字無き物語の世界を一旦訪れると何度も再訪せずにはられない。

(英文学科准教授 中村 昌弘)

その他の新刊一覧

石川康宏(総合文化学科教授) 他著
『原発事故を子どもたちにどう伝えるか』
(合同出版)

石川康宏(総合文化学科教授) 他著
『軍事立国の野望』
(かもがわ出版)

石川康宏ゼミナール 著
『21歳が見たフクシマとヒロシマ』 (新日本出版社)

河西秀哉(総合文化学科准教授) 他著
『昭和天皇実録』講義』 (吉川弘文館)

津上智実(音楽学科教授) 他著
『わからない音楽なんてない！
—子どものためのコンサートを考える』
(アルテスパブリッシング)

川越栄子(共通英語教育研究センター教授) 他編著
『これだけは知っておきたい看護英語の基本用語と
表現 改訂新版』 (メジカルビュー社)

<キャンパスお気に入りの場所>

中 庭

神戸女学院には、皆様ご存知の通り、たくさんの魅力的な場所があります。校舎の中でも外でも、目に映る風景全てが絵になる様な気がします。私のお気に入りの場所はたくさんあるのですが、今回は、その中のひとつ「中庭」をご紹介します。

私が中庭を気に入っている理由は、四季を通じて学生・生徒達の笑顔が見られる場所だからです。春は入学式です。講堂で執り行われる式典が終わり、これから始まる学生生活にわくわくしている新入生の笑顔にたくさん出会えます。夏休みが始まるまでは、一日中、くつろいだりランチをしたりする学生の楽しそうな声が聞こえます。秋になると大学祭です。中庭が一年でいちばん騒がしくなる2日間です。音楽や笑い声と美味しそうな匂いに、おなかも心もいっぱいになります。寒くなる冬にも、日向ぼっこをしながら歓談する学生の笑い声が聞こえてきます。そして、卒業式を迎えます。中庭の茶話会では、泣いた後の最高の笑顔が見られます。このように、私が素敵だと思う風景にはいつも学生・生徒達の笑顔があります。神戸女学院に学ぶ全ての方が、ふと笑顔になれるお気に入りの場所を見つけられるといいなと思っています。

最後になりましたが、今回から始めました「キャンパスお気に入りの場所」を通じて、色々な方の色々なお気に入りの場所を教えていただけるのを楽しみにしています。

(院長室)



院長室から眺める中庭

私のパワースポット

今から約10年前の暑い夏の日、オープンキャンパスで神戸女学院大学を訪れた私は、その校舎の美しさで一瞬にして心を奪われました。中でも、総務館、図書館、文学館、理学館の4つのヴォーリズ建築に囲まれた中庭の中心に立った時に、「絶対にこの大学で学びたい！」と決意したことを覚えています。4年間の学びの期間を経て、現在、縁あって母校で勤務するという素晴らしい機会を与えていただき、もうすぐ5年目を迎えようとしています。通勤途中に見る正門、坂道、音楽館、デフォレスト館、文学館などが毎日見る当たり前の風景になってしまっている今でも、中庭の中心から見る景色はいつでも私を10年前の私へとタイムスリップさせてくれます。そして、学生時代からの様々な思い出が蘇り、この場所で素晴らしい学友と過ごせたこと、また、素晴らしい教職員の方々の中に迎え入れていただけたことに感謝の気持ちと喜びが湧いてきます。つまり私のパワースポットなのです。

どの季節に見る中庭も好きなのですが、特に、何年か前の冬、雪が積もった時には本当に幻想的で美しかったことを覚えています。季節ごとに様々な顔を見せてくれるのも中庭の魅力です。

他にも、講堂、ソールチャペル、シェイクスピアガーデン、藤棚など、キャンパスお気に入りの場所をあげるとキリがありません。どこをとっても絵になる、最高の環境で勤めさせていただけることに毎日幸せを感じています。

(文学部事務室)



2年前のバレンタインデーに中庭に積もった雪

大学報告

高大連携授業報告

中高部中間考査翌週の11月2日と6日の両日、中高部長、教諭2名のご協力をえて、英文学科模擬授業を大学MM教室で実施致しました。グローバル・スタディーズコース（S1生全員対象）と通訳・翻訳プログラム（S1、S2の希望者対象）の体験授業で、授業アンケート結果もよく、すでに来年度の計画も始めています。以下、担当者からの報告です。 （英文学科長 和氣 節子）

“Learning with Technology at Kobe College”

Technology is rapidly changing classrooms around the world. On November 2 I had three model classes with KCH students in which we explored the use of iPads to learn about International Relations. The goal of the classes was to teach students about the background of the conflict between the US government and Okinawan residents in relation to the large number of US military bases in the prefecture. I began the class by having students use the iPads to learn basic information about the US bases. This included having students draw digital maps of the location of US bases in Okinawa on the iPads, and then displaying them for discussion using an overhead projector. Next I used the iPads to have discussions in English with the students on the policies and conflicts related to the US bases. During the final portion of the class the students confirmed what they had learned by taking a short quiz with the iPads. （英文学科教授 Shawn Banasick）

“Welcome to the World of Interpreting”

My class on November 6 was prepared as an introduction to interpreting — I used videos and presentation materials to help the students understand the process of interpreting (comprehension, analysis, retention and reformulation), and also spent some time explaining the skills required for interpreting. The class also included two exercises: the first was a memory exercise that taught students the importance of curiosity and general knowledge when trying to remember things. In the second exercise the students actually tried interpreting themselves — in pairs, they took turns interpreting each other from Japanese to English. By the end of the class, the students had gained an understanding of the positive impact that interpreting study and practice has on not only English production skills, but also communication skills in general. （英文学科准教授 奥村 キャサリン）



英文学科グローバル・スタディーズコース模擬授業



「通訳・翻訳プログラム」模擬授業

第40回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSSES) 大会報告

本年度も英文学科では、KCSSES 大会を例年同様11月の最終金曜日、27日午後に文学館にて開催致しました。今年は英米文学・文化コースが学会準備を担当。東京大学名誉教授 平石貴樹氏をお迎えし、特別講演「早わかりフォークナー」を拝聴しました。

平石先生は、20世紀アメリカ最大の小説家、フォークナーの魅力といえる、「強情な人物たちの極限状態を派手な筋立て」で表現する「モダニズム的手法」の特徴を、実際の作品からの多くの引用例を用い、また夏目漱石や芥川龍之介の文体との比較も交えながら、ご説明くださいました。その場にいた学生や院生から、フォークナーファンが増えるであろうことが大いに期待できる、貴重で刺激的なご講演でした。

学会前半部では、本学大学院文学研究科博士前期課程修了の2名が以下のタイトルで研究発表を行いました。佐藤花奈氏(英語学コース、GE130、現、兵庫県立高砂高等学校常勤講師)“An Underspecified Tense in Jamaican Creole”、豊島知穂氏(通訳・翻訳コース、GE132、現、関西外国語大学非常勤講師)「下訳修正における誤りカテゴリーは、学習者レベル別によりいかに異なるか」。両者とも熱意のこもった意義深い研究成果発表で、今後の益々の研究の発展を感じさせる喜ばしいものでした。

当日、ご参加くださった旧教職員、並びに他学科の先生がた、KCSSES 会員の皆さまに御礼申し上げます。

(英文学科長 和氣 節子)

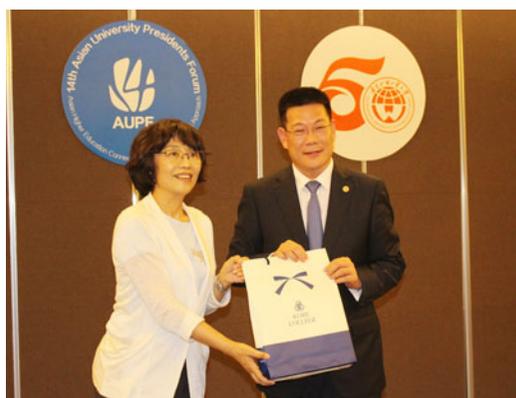


ご講演中の平石貴樹氏

広東外語外貿大学式典・AUPF参加報告

11月5日から9日まで、本学の姉妹校である中国の広東外語外貿大学の創立50周年記念式典ならびに同大学で開催された第14回 AUPF (アジア大学学長フォーラム) に出席、アジアを中心とする高等教育の現在に触れる機会を得た。広東外語外貿大学と本学の好誼は1986年に遡るが、以来、同大学は国家の経済的發展とともに大きく成長、今日では、英語を始め20課程の外国語教育と7学部構成の専門課程教育を有する中国トップの外国語大学の一つとなっている。毎年135カ国から留学生13,000人を迎えるなど、世界の大学との交流も盛んで、50周年式典は、国内関係者、在学生、同窓生、旧教員の他、各国からのゲストが参加し盛大に行われた。AUPFでは、中国、韓国、日本、東南アジア、欧州、アメリカ、アフリカ等の諸大学代表団が、新しい高等教育連携の推進をテーマに、相互の人的交流や教学連携を促進する技術の披露や情報交換を行った。今回報告された大きな成果の一つは、英語によるオンライン教育システム GAA (Global Asia Access) である。GAA は、各大学がそれぞれ提供する授業科目のうち最も優れたものを一つ提供すれば参加できる仕組みとなっており、その長所は MOOC にはないアジア的視点があること、また将来はアジア各国の言語で受講できる計画があることだ。今、世界の大学は渡航費用をかけない新しい国際教育を連携して実現しようとしている。従来型の留学制度の充実に加え、こうした新しい国際教育の導入も検討すべきだろう。

(教務部長・副学長 溝口 薫)



広東外語外貿大学50周年記念式典と仲学長

地域創りリーダー養成プログラム 食堂メニュー提供について

地域創りリーダー養成プログラムでは、地域活性化をテーマに、学生たちが学科の垣根を超え、地域に根ざした活動について学んでいます。

複数のグループに分かれて学びを深めています。そのうち、総合文化学科、心理・行動科学科、環境・バイオサイエンス学科の学生達で構成されるグループでは、「地産地消」や「食べ物の安全性」について考えてもらう機会として、地域の子ども達を対象にイベントを開催しました。

イベント開催のため、学生達は甲山の麓にある畑で4月から数か月間、野菜の播種から収穫までの管理を学んできました。

昨年の12月10日、11日の2日間、食堂のご協力を得て、学生が育てた野菜を使ったメニューが提供されました。メニュー選定の打ち合わせから、野菜の収穫・搬入までの全工程を学生たちが自主的に運営しました。

当日のメニューはスイートポテト、さつまいもスティック、カブの小鉢、ふるふき大根、大根の味噌汁に決定。2日目には野菜の販売も行い、大好評のうちに完売となりました。

今回の企画を考えた学生達は、育てた野菜を味わって欲しいという気持ちはもちろんのこと、自分達が学んでいる「地域創りリーダー養成プログラム」についてもっと多くの人に知ってほしいという思いもあったようです。

最後になりましたが、食堂メニュー提供についてご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。

(環境・バイオサイエンス学科教授 高岡 素子)



野菜販売の様子

フィリピンの子どもたちとランウェイの上で夢を描く

文学部 総合文化学科 3年生

昨年の8月15日から19日までの5日間、神戸女学院大学生を主に、計9名でフィリピンへ向かい、現地の貧困地域で暮らす子どもをモデルにしたファッションショープロジェクト、「DEAR ME」を開催しました。

「DEAR ME」とは、オシャレをしてランウェイを歩きながら将来の自分の姿を想像し、夢を描くファッションショープロジェクトです。

私は今までの人生を振り返ると、ファッションから生きるきっかけを多くもらってきたと感じているので、ファッションを楽しむことができない環境にいる子どもたちに、ファッションで人生を描くきっかけを作りたくてこの活動を始めました。

しかし、私たちはフィリピンを訪れたことも、知り合いが現地にいるわけでもありませんでした。また開催の1ヶ月前までは、モデルが着る服もなく、会場も決まっていない状況だったので、ゼロの状態から始め、そしてそこから一歩を進んでいくことはなかなか困難でした。そんな中、地道に服飾専門学校や、アパレル企業などへ訪問してこの活動の協力を募り、最終的には11社もの企業から衣装の協賛などで協力をしていただくことができました。

そして昨年8月、フィリピンのケソン市にあるパヤタスという巨大なゴミ山の付近のスラム街で生活をする子どもたちがモデルになり、「DEAR ME」をマニラ市立大学で行いました。20人の子どもがランウェイを歩き、会場は800人の観客で溢れ、皆で夢を描きました。



ショー後の子どもたちとの集合写真

2015年度音楽学部定期演奏会報告〈11/29〉

2015年度の音楽学部定期演奏会は、11月29日(日)午後4時より兵庫県立文化センター KOBELCO 大ホールに於いて行われました。今回は、前半に合唱のステージとして1、2年生によって高田三郎作曲「遙かな歩み」(伴奏：湯川美佳伴奏要員)、3、4年生によってゲレロ作曲アヴェ・マリアの祈り、ウガルデ作曲ミゼレーレ、エルベルディン作曲カンターテ・ドミノ、松下耕作曲カンターテ・ドミノ変ロ長調の宗教作品4曲(伴奏：須山由梨伴奏要員)が演奏され、前半の最後には1年生から4年生までの合同で、信長貴富作曲「くちびるに歌を」(伴奏：須山由梨伴奏要員)が演奏されました。通常1、2年生と3、4年生は、別の時間の授業で合唱を履修していますが、今回合同演奏もあるということで、ご担当の山口英樹先生(非常勤講師)の熱いご指導そして指揮のもと、まさに息の揃った芸術性の高い演奏を聞くことができました。

後半には、大学院生の中からオーディションで選ばれた齋藤遥佳さん(本学音楽研究科2年生)をソリストとしてラヴェルのピアノ協奏曲ト長調が辻井淳准教授指揮で明るく澁刺と演奏され、学部生たちもあこがれの目をもって演奏に聴き入っていました。また、26年間にわたり本学で学生の指導にあたり、様々な本学行事の企画・演奏にお力を尽くされ、本年度末でご退職される中村健教授の指揮によって、モーツァルト作曲「魔笛」序曲、ブリテン作曲青少年のための管弦楽入門が演奏されました。なかでもブリテンの曲は、英語によるナレーション2名が楽器の説明をしながら曲が進んでゆくという珍しい曲ですが、本学大学院1年生の中西千尋さん(声楽専攻、通訳・翻訳プログラム修了)と学部4年生の藤井ひかりさん(声楽専攻、昨年アメリカのボーリンググリーン州立大学派遣留学修了)の素敵な英語ナレーションは、中村昌弘英文学科准教授のご指導のもとこの壮麗なブリテンの演奏に花を添えていて、音楽学部の芸術性の高さの本学英語教育の層の厚さを対外的に示す良い機会となりました。

また、今回の定期演奏会は、合唱とオーケストラというプログラムでしたから、実際の当日の舞台は、休憩時間中にオーケストラのすべてのセッティングを済ませなければならず、リハーサルの段階から教員、学生が丸一となって舞台の表裏を走り回り、いつものことではありますが、音楽学部総動員のチームワークが演奏会を成功させた要因であると思います。当日は恒例のメサイアや第九に迫る883名もの多くの方にご来聴いただき、すべてのプログラムが成功裡に終わりましたが、アンコールとして中村健教授のお気に入りの讃美歌「聞け、天使の歌」を皆さんと共に高らかに歌ったことも感動的な瞬間でした。来年2016年の定期演奏会は、恒例のメサイアを予定しています。また来年に向かって学部丸一となって頑張る決意を胸に、ご協力いただいたすべての方々には心からの感謝を申し上げます。

(音楽学科長 田中 修二)

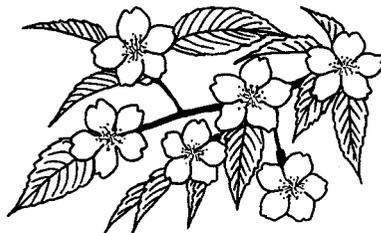


ブリテン：青少年のための管弦楽入門

第7回舞踊専攻卒業公演

去る12月10日、11日、12日に本学エミリーブラウン館の舞踊専攻スタジオにて、第7回音楽学部音楽学科舞踊専攻卒業公演が行われました。舞踊専攻主任の島崎作品を含め、客員教授のオーウェン モンタギュー先生、非常勤講師の砂連尾 理先生と鞍掛綾子先生に振り付けをお願いした結果、それぞれの先生方の個性が活かされたバラエティに富んだ公演となりました。公演1作品目は、島崎振り付けによる「Zero Body」を研修生の服部千尋を含めた9名が踊り、休憩を挟んで、砂連尾先生作品「My favorite thing」、モンタギュー先生作品「Woven」、鞍掛先生作品「from X toX」の3作品、2度目の休憩後最後にもう一度島崎振り付けによる、「Separate reality」で幕を閉じました。5作品の中の4作品が新作ということで、途中体調を崩す者などもいて、学生達にとっても教員にとっても大きなチャレンジでしたが、今年度の4年生のチームワークの良さと後輩達のサポートもあり、無事に3日間計4公演を踊りきることができました。西宮市市長の今村岳司様にもご来場頂き、森院長を通して温かいお言葉を頂きました。4公演全てチケットはほぼ完売し、ご来場頂きました多くの方々より沢山の励ましのお言葉を頂戴いたしました。この場をお借りして御礼申し上げます。

(音楽学部教授 島崎 徹)



島崎徹振付作品「Separate reality」

2015年度 卒業論文題名

~~~~~  
文学部 英文学科  
~~~~~

~~~~~  
文学部 総合文化学科  
~~~~~

2015年度 博士論文題名

~~~~~  
文学研究科  
~~~~~

~~~~~  
2015年度 音楽学部卒業演奏会演奏曲目  
~~~~~

~~~~~  
2015年度 音楽研究科修了公開試験曲目  
~~~~~

2015年度 卒業論文題名

~~~~~  
人間科学部 心理・行動科学科  
~~~~~

2015年度 博士前期課程・修士論文題名

~~~~~  
人間科学研究科  
~~~~~

~~~~~  
人間科学部 環境・バイオサイエンス学科  
~~~~~

個人情報保護のため、25ページ目から
45ページ目は削除しています。

＜先輩からのメッセージ＞

すべては今に繋がっている

藤田 彩

(人間科学部人間科学科人間環境専攻卒業)

私は大学時代に合格した基本情報技術者試験の実績を生かし、2013年に「事務(情報)」という枠で高松市役所に採用されました。情報政策課に所属し、主に役所内のコンピュータ・ネットワーク、情報セキュリティの管理を行っています。

知識だけでは、実地のトラブルに対応できず、入庁当初は焦りが募るばかりでしたが、2年目で庁内システムの更新という大きな仕事を任せられ、信頼できる上司たちに助けられながら、無事稼働にこぎつけたときは、私の居場所がここにある実感を持ってました。少しずつ、業務の幅が広がっていることを感じます。

大学時代は、1回生から動物生態学の研究室に入りさせていただき、研究対象に長期間取り組む粘り強さを学びました—と言えば聞こえはいいですが、単純に没頭できるものに出会えて、時間と情熱を費やす喜びを知りました。また、情報科学や心身医学等興味ある分野の先生や職員の方に懇意にさせていただいたことは今も私の財産です。大学では、自分らしさを良い方向に伸ばすことができ、それらはすべて、今に繋がっています。

思い返せば、大学時代はやみくもに必死だったと苦笑いですが、それらを無駄にするか、糧にするかは自分次第です。神戸女学院大学は、いろんな種がたくさん落ちている場所です。それを見つけ、ぜひ開花させてください。



庁内システムの利用者研修にて

先輩からのメッセージ

前澤 優華

(文学部総合文化学科卒業)

私は2008年3月に卒業し、4月から損害保険ジャパン日本興亜株式会社(以下、損保ジャパン日本興亜)に勤務しています。福井県が実家であることを優先した事でUターン就職を選択し、今現在は損保ジャパン日本興亜の福井支店に所属しています。

入社前、「人とのコミュニケーション」に関わりながら、自分自身の視野を広げ成長したいという目標があり、損保会社は「保険という目に見えない商品を販売しているからこそ、社員ひとりひとりの人材力が重要だ」と先輩によるご講話を拝聴した事が心に響き、入社を決断しました。

これまで、人事・営業推進・秘書など様々な業務を担当してきました。

特に営業推進業務では、主に自動車整備工場の保険代理店が所属している会の事務局を担当しており、以前までグローバル職(一般的に言う総合職)が行ってきた業務であった、会のスケジュール・活動方針や、各種研修などの企画立案、研修の司会進行に至るまで全てを担当させてもらえるようになりました。

元々私は、人前に立つことが苦手で、積極的な方ではなかったのですが、女性活躍推進が浸透し、職種において分け隔てなくできる環境にあるおかげで、前向きな思考に変化し、様々なことにチャレンジし、毎日楽しくやりがいを感じられています。

これから社会人になるみなさんも、自分の目標は何なのか、これから様々な場所に足を運び、沢山の人の人と関わることで探してみてください。きっと、ワクワク楽しい未来が待っていますよ。



研修会で司会をしている時の様子

2016年度大学入試結果中間報告（2/23現在）

2016年度入試においては大きな制度変更もなく、各種模試データにおける本学志望動向からも苦戦が予想されていました。そのうえ、指定校推薦等年内入試の志願者も昨年度より大幅に減少という非常に厳しい状況で一般入試を迎えました。

結果は、2年目を迎えたA日程3科目型が志願者483名（前年比136%）と健闘、B日程も同479名（同124%）と復調し、前期日程（A・B・C・D）総志願者数も2,245名と昨年度より微増となりました。学科ごとの内訳では、英文学科は603名（前年比104%）、総合文化学科は845名（同比101%）、音楽学科は22名（同比67%）、心理・行動科学科は486名（同比107%）、環境・バイオサイエンス学科は289名（同比113%）と、多くの学科で前年を上回りました。①成績優秀者給与奨学金制度（A日程）、②学外会場（高松・広島）の新設、③国語の出題範囲の変更（A日程→古文必須、B→現・古選択、C→現代文のみ）、などが比較的多くの受験生の志願に繋がったと考えられます。

前期 AB 日程は1月28日～30日、CD 日程は2月

16日に学内外7会場で実施し、2月8日にAB日程682名、2月23日にCD日程181名の合格者を発表しました。また、大学入試センター試験を利用する入試（以下 DNC 試験）（前期日程）では全学科合計で昨年比115%の481名が出願し、2月12日に256名の合格者を発表しました。

一般入試後期日程は3月7日に文学部・人間科学部で実施され、DNC 試験（後期日程）とあわせて3月16日に合格者を発表します。

少子化の大きな波が押し寄せる2018年を目前にしておりますが、我々は数だけではなく、キリスト教主義・国際理解・リベラルアーツという創立以来の本学教育の根幹に共感する優秀・良質な学生を確保し続けなければなりません。そのためには、成績優秀者給与奨学金制度の更なる充実など、学院全体として取り組むべき課題も多くあるように思います。引き続き皆さまの力強いご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

（入学センター・広報室課長）



<派遣留学報告>

梨花女子大学

ミリアム大学

留学を通して感じたこと

フィリピンでの学び

文学部 総合文化学科 4年生

人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 3年生

私は、韓国の梨花女子大学に派遣留学生として約10ヶ月間留学をしました。所在地はソウルで、学生数は約3万人の、女子大として世界一の規模を誇る総合大学です。また、留学生は欧米やアジア、アフリカやオセアニアなど世界各地から来ていました。

私が履修した科目は、教養韓国語や Korean Ceramics 2 などです。授業は週2回あります。また、英語で開講されている授業が約300あり、留学生の多くは教養韓国語以外英語で開講されている授業を受けていました。そのため、韓国語だけでなく英語も同時に学ぶことができました。これは梨花女子大学に留学する1つの利点です。

教養韓国語は留学生のみに開講されている授業であり、半年で1つのクラスが修了します。1級(初級)～6級(上級)まであります。私は2級と3級を半年間ずつ受講しました。3級を受講中に留学生バディが「정말 한국어 좋아졌다!! (本当に韓国語良くなった!!)」と褒めてくれました。授業時間は月～木曜日の1・2限(8時～10時45分)です。毎日毎日同じメンバーで半年間過ごすので、クラスの皆と仲良くなりました。クラス会を開いたり、遠出をしたり、コンサートに行ったりしました。

私は梨花女子大学で本当にたくさんの方々に出会い、お世話になりました。日韓関係が冷え切っているといわれていますが、国という大きな枠組みではなく一人一人の人間として本当に仲が悪いのか?という疑問を持って留学をしました。いざ韓国に行ってみると、行く先々で私を温かく迎え入れてくださいました。情報を鵜呑みにしないで自分の目で確かめたり、体験したりすることがいかに重要なのかを知りました。これこそ本当の国際交流だと思えます。

最後に、神戸女学院大学国際交流センターの皆様には大変ご尽力いただき、心より感謝申し上げます。



留学生とフライドチキン店にて

私は8月からの5か月間、フィリピンのミリアム大学に留学させていただきました。私は環境バイオの学生ですが、英語をもっと自由に使えるようになり世界中の人とコミュニケーションをとりたい、自分の知らない世界を知り自分を成長させたいという強い思いがありフィリピンへの留学に挑戦しました。

最初はこの国で半年も生活していけるのか不安なことばかりでしたが、明るくて大らかなフィリピン人の人柄にいつも支えられいつしか不安は消え、楽しさに変っていました。

ミリアム大学のあるケソン市は名門の大学が集まる学生の街でした。観光とは違って、地元の学生たちと同じものを食べ、同じ乗り物に乗り、同じ生活をするので、同じ目線からフィリピンを感じる事ができました。発展途上国であるフィリピンには様々な問題があり、大学の外に出ればストリートチルドレンを見かけ、物乞いをされることもありました。経済発展が進むフィリピンでは貧富の差が顕著になっていてショックを受けたり悲しくなることもありましたが、でもすごいと思うこともあり、女性が社会ですごく活躍していて、日本よりも明らかに男女の平等が進んでいました。

大学では、私の専門である生物学や、スピーチ、発展途上国についての授業をとりました。現地の学生と肩を並べて、英語での授業についていくことは大変でしたが、クラスメイトや寮の友達にいつも助けられていました。フィリピンの学生はみんな将来の目標を明確に持っていて、それに向かって一生懸命、積極的に学んでいる姿に、私はいつも刺激を受けていました。

留学生活を通して、英語力の向上はもちろんですが、それ以上にフィリピンでしか学べない多くの大切なことを学ぶことができたと思います。フィリピンで出会い私を支えてくれたたくさんの素敵な人たち、日本から私を支えてくれたすべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。派遣留学に挑戦したこと、フィリピンのミリアム大学を選んだこと、今では誇りに思っています。



仲良しの寮の友人と

アサンブション大学

フィリピンで学んだこと

文学部 英文学科 2年生

私は1回生のとき、「日本を外から見てみたい」という思いから、日本とできるだけ異なった国に留学しようとフィリピンのアサンブション大学を選びました。様々なイメージを抱きながら、いざマカティに足を踏み入れてみると、想像とは全く違う景色が広がっていました。大学の周りには巨大なショッピングモールや高層オフィスビルが立ち並んでおり、治安の良さも日本とそこまで変わらないように感じられるほどでした。しかし、マカティを一步出ると、都心とはかけ離れた情景に愕然とさせられます。私はメディアの学科を専攻していたので、授業で現地のテレビ番組などを観る機会があったのですが、貧困層の様子を伝える内容のものが多いことに気がきました。現状として人々の生活に大きな格差はあるものの、難しい問題から目を背けずに解決していこうという気持ちが、この国の社会にきちんと広がっているのだと感じました。そういった意識は、課題をしていく中でも感じられました。例えばテレビ番組の企画書を作る課題で、これを解決したい、という題材を見つけてくるだけではなく、その問題をどの様に解決していくかという具体的なところまで深く考えさせられました。現地の学生は皆とても勤勉で、何をやるにも向上心を持っていました。自分たちがこの国を発展させていくのだという認識を持ち、将来像をしっかりと描いている友人が多く、感心させられたことは一度や二度ではありません。私は留学以前、将来のことを考えると決まって失敗を想像し、消極的になっていました。しかし、疑うことなく夢を叶えようとしている友人たちの姿は、私の考え方を大きく変えてくれました。知識や英語力の向上はもちろんですが、フィリピンの人々の何事にもまっすぐひたむきな姿勢を学べたことが、この留学での一番の収穫だったように思います。



留学先でできた友人と

<認定留学報告>

オレゴン大学

アメリカでの1年間

文学部 英文学科 4年生

私はアメリカのオレゴン州にあるオレゴン大学で約1年間留学をしました。アメリカに憧れがあり、長期で滞在したいといふかねてからの思いがついに実現した留学でした。旅行などで訪れたことは何度もありましたが、住んでみて気付くことや、カルチャーショックがたくさんありました。細かいところまでルールがあり全てが組織化されている日本とは全く違って、アメリカはフリーダムで伸び伸びとしていて正反対だなあと感じました。

私は以前、語学学校だけの短期留学プログラムに行っていたことがあったので、オレゴン大学では最初からアメリカの学生と一緒に受ける学部の授業を取りました。授業でも、日本と違い、アメリカの学生は先生の話を通してまで質問や発言をしたり、いい成績を取るためにほとんどの学生が真剣に取り組み、平日でも毎日夜中まで図書館がいっぱいだったことに驚きました。そのような現地の学生たちに始めの頃はついていくのに必死でしたが、慣れて来た頃には私もディスカッションのクラスで発言をすることができたり、現地の学生よりもいい成績を取れた時は達成感と嬉しい思いでいっぱいでした。朝まで図書館で課題をしたのもいい思い出に変わりました。

夏休みはハワイで農業ボランティアに申し込んで現地の方の農業をお手伝いしたり、冬は友達とユタ州にスノーボードをしに行ったり、オレゴンでも自然を満喫したり、現地の友達や色々な国の人とも友達になり、たくさん話をして価値観を共有し、様々なことに挑戦して本当に濃い1年間でした。自分から行動することで色々な道が開けたなあと思います。この経験をこれからの人生に活かしていきたいです。国際交流センターの皆様をはじめ、この機会を支援して下さいました皆様へ感謝します。



毎試合盛り上がるオレゴン大学のアメフトのホーム試合にて

〈神戸女学院大学の企画による2016年度夏期語学研修参加者募集〉

2016年度の夏期語学研修は、次の5プログラムが実施予定です。詳細は4月作成予定の募集要項をご参照ください。また募集説明会を実施する予定です。日程は、決定次第、国際交流センター掲示板とK-CLIPで告知します。春期（2017年2～3月）にも語学研修を予定しています。詳細は国際交流センター（デフォレスト館1階）まで。TEL：0798-51-8579 Email：kokusai@mail.kobe-c.ac.jp

第7回 西オーストラリア大学（豪州）

時期：2016年8月～9月 募集人数：20人 参加費用：約55万円

西オーストラリア州のパスにある自然豊かなキャンパスで、約4週間、総合的に英語を学ぶ。ホームステイ。

第2回 ケンブリッジ大学（英国）

時期：2016年8月～9月 募集人数：15人 参加費用：約80万円

ケンブリッジ大学ヒューズホールにて約4週間の英語研修を受講する。午前中英語集中レッスン、午後はケンブリッジ大学生とのフィールドワーク。ホームステイ。

第7回 カリフォルニア大学アーバイン校（米国）

時期：2016年8月 募集人数：20人 参加費用：約75万円

他国の留学生と共に約4週間、基礎および応用英語を学ぶ。英語力によっては、ビジネス英語クラスを受講することも可能。ホームステイ。

第5回 ヨーク大学（カナダ）

時期：2016年8月 募集人数：20人 参加費用：約60万円

多文化都市トロントにあるカナダで3番目の規模を誇るヨーク大学にて、約4週間の英語研修を受講する。現地学生との交流や学外活動も含む。大学寮。

第9回 フランシュ・コンテ大学（仏国）

時期：2016年8月～9月 募集人数：15人 参加費用：約65万円

パリから電車で約2時間半のブザンソンで、フランス語を約4週間集中的に学び、生きたフランス語を吸収する。隔年実施の研修。

研究所活動報告

演奏会 (2015年6月26日)

演奏曲：

C. P. E. バッハ

ハンブルクソナタ ト長調 Wq133/H564

W. A. モーツァルト

ソナタ 変ロ長調 KV15

J. S. バッハ

音楽の捧げもの BWV1079より

フルート、バイオリンと通奏低音のための

ソナタ

演奏者：

フルート	Xavier LUCK	音楽学部専任講師
バイオリン	辻井 淳	音楽学部准教授
チェンバロ	中出 悦子	音楽学部卒業生
チェロ	成川 昭代	大阪チェンバー オーケストラメンバー

講演会 (2015年11月20日)

「女性のライフステージと健康管理」

奈良県立医科大学産婦人科教授 小林 浩 氏

研究所総会研究発表

〈前期：2015年7月3日〉

“After 9/11:

Changes in the Contemporary American Elegy”

古村 敏明 英文学科 准教授

In the aftermath of 9/11, there was an enormous outpouring of poems of lament, and those poems enthralled people who sought healing and national understanding of the tragedy. This presentation examines the changes in the English elegy after 9/11. In the twentieth century, the elegy had diverged from the formulaic consolation of the classical period to adopt melancholic disconsolation as its predominant mood, but 9/11 has triggered another shift: the poetics of equivocation, epitomized by Wisława Szymborska's "Photograph from 9/11" and its sense of make-believe suspension that the still photograph creates. Observing that

post-9/11 elegies rely on neither consolation nor disconsolation as their prevailing trope, this presentation inquires: what is the function of the contemporary elegy? How does it console, if it does at all?

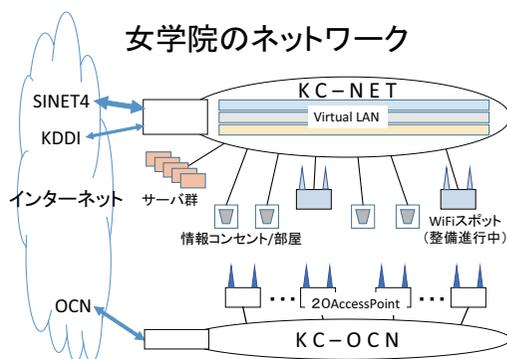
〈後期：2015年12月4日〉

「本学の ICT 基盤～来年のシステムは...」

出口 弘 環境・バイオサイエンス学科教授

本学の ICT 基盤の現状と2016年夏に予定しているシステムリプレースについて紹介した。

本学の ICT 基盤としては、SINET、KDDI、OCN の外部接続を有するネットワークに、メール、Web、e-Learning 等のサービスを提供するサーバ群およびパソコン教室 (CS・CALL・MM) 等の CSL ドメインの Windows パソコンその他が接続されている。2007年から導入している統合認証システムによって、CSL ドメインの Windows ログオン、Active! mail、Web、Moodle 等を1つの認証パスワードで利用できるようになっているが、同時に利用する際でもそれぞれにユーザ名とパスワードの入力を必要としている。



無線 LAN 環境としては、インターネット接続の二重化を狙って2003年に整備した Hotspot の後継の KC-OCN に加え2008年からは KC-NET (学内 LAN) 配下の Wi-Fi スポットを拡張整備しつつある。無線 LAN も有線 LAN も、登録申請された機器は端末認証によって接続でき、本学のアカウントを持っていれば Web を使ったユーザ認証によって自分のデバイスを接続して利用できる BYOD 環境

である。

2016年夏のリプレースでは、最近整備したWi-Fiスポット以外のKC-NET、サーバ群、パソコン教室およびパソコンを対象とし、利用者の使い勝手を維持すべく、Active! mail と Moodle はバージョンアップして継続利用する。今回のリプレースの目玉はシングルサインオンで、パソコン教室でWindowsにログオンした後は、Active! mail、Web、Moodle等を認証操作抜きで利用可能になる。また、リプレースと並行して、Wi-Fiスポットの拡張整備も進めていく。

専門部会研究発表会

1. 英文学科 2015年6月16日
 “False Witness Under Hypnosis:
 Beckett’s Theatrical Trilogy”
 Corey WAKELING 専任講師
2. 環境・バイオサイエンス学科 2015年6月23日
 「ヒトはストレスに対してどう反応するのか？
 —細胞のストレスモデルからわかること—」
 西田 昌司 教授
3. 総合文化学科 2015年7月8日
 「平氏政権と女性」
 栗山 圭子 専任講師
4. 英文学科 2015年11月12日
 “Learners’ Image of Translation:
 Content Analysis of Open-Ended Responses”
 田辺 希久子 教授
5. 心理・行動科学科 2015年11月27日
 「在米邦人児童の異文化ストレスと現地校適応
 について」
 森 真佐子 客員准教授
6. 総合文化学科 2016年1月20日
 「日本におけるベトナム難民の障がい者支援
 —『あかつきの村』の事例調査」
 北川 将之 准教授

7. 音楽学科 2016年1月20日
 「身体はしゃべる」

島崎 徹 教授

専門研究会

1. 「21世紀のアメリカ小説小史」 2015年6月24日
 “The 21st Century American Novel:
 A Brief History”
 Professor at the University of Illinois,
 Urbana-Champaign Gordon Hutner 氏
2. 「文化史のなかの著作権」 2015年7月3日
 東京大学大学院人文社会系研究科教授
 渡辺 裕 氏

助成・補助

- | | |
|-------------|----|
| 出版助成 | 2件 |
| 研究助成 | 6件 |
| 総合研究助成 | 3件 |
| 専門研究会補助 | 2件 |
| 専門部会研究発表会補助 | 7件 |
| 国際学会出張補助 | 5件 |

発行物

- 『論集』第62巻第1号（通巻第174号）2015年6月発行
 『論集』第62巻第2号（通巻第175号）2015年12月発行

(研究所)

女性学インスティテュート活動報告

特別講演会

2015年5月15日

「『授かる』から『作る』へ？

—生殖をめぐる技術の発展と課題—

大阪大学大学院医学系研究科

医の倫理と公共政策学

特任助教 小門 穂 氏

連続セミナー

テーマ「はたらくこと・そだてること」(全4回)

(女性学インスティテュート)

〈第1回〉 2015年5月22日

「男性から見た『ワークライフバランス』

：日本と他国男性の意識調査から分かったこと」

奥村 キャサリン 英文学科准教授

〈第2回〉 2015年5月29日

「理系女子の生きやすさ、生きにくさ」

高岡 素子 環境・バイオサイエンス学科教授

〈第3回〉 2015年6月5日

「子供のことばを育てること—言語習得の調査から

分かった親のできることは？」

松尾 歩 英文学科教授

〈第4回〉 2015年6月12日

「インド農村議会の女性議員の子育てと仕事

—マイクロファイナンス・留保制度・政治意識—

北川 将之 総合文化学科准教授

学生懸賞論文(第17回女性学インスティテュート賞)

1編応募。優秀賞1編。

授業

Cu134(1)(2) 「女性学(実践編)」

Cu234(1)(2) 「女性学(理論編)」

Cu233(2) 「ジェンダー・スタディーズ(Ⅱ)」

インターディシプリナリープログラム

1名修了。

発行物

『女性学評論』第30号(2016年3月発行)

<私の研究>

私の研究

吾妻 壮



私は精神医学を専門とし、特に精神分析および精神分析的な心理療法を中心に実践・研究して参りました。近年、日本における精神医学の研究はその多くが脳科学に関するものとなり、私のように心理療法を専門とする精神科医は極めて少数です。この傾向は全世界的に見られるものなのですが、その程度は国によって様々で、私が訓練を受けた米国では心理療法の研究もまだまだ健在でした。米国の精神医学というと、先進的なテクノロジーがイメージされるかもしれませんが、確かにそういう部分もあるのですが、米国精神医学の現場は意外なほどに地道な作業を重んじているというのが私の経験でした。訓練では、患者に一人の人間として向き合い、共感的に話を聴くという基礎が繰り返し強調されていました。そのような環境ですから、基礎訓練を終えると自然と心理療法の専門の道に入る精神科医も決して少なくなく、私もその一人でした。

ところで、心理療法には様々な種類があり、考え方も様々です。例えば認知行動療法という治療法では、感情の障害の背景には思考と行動の問題があると考えて思考と行動のレベルに働きかけようとしています。一方私の専門の精神分析では、思考と行動の背景には十分に意識化されていない感情と動機づけがあると考えてそれらを探索します。多々ある心理療法の中でさらにどれを専門的に勉強するのかの選択ですが、受けた訓練プログラムや指導者の影響ももちろんあるのですが、最終的には個人的な好みによるところが大きいように思います。私には精神分析の考え方が馴染み、精神分析を専門にするに至りました。私は科学的・合理的な思考を好みつつも、情念の世界の方に一層惹かれやすいのだと思います。精神分析はそんな私の性に合っているのだと感じています。

(心理・行動科学科教授)

夢を実現する英語教育研究

川越 栄子



私の研究テーマはESP教育研究です。ESP (English for Specific Purposes) は「特殊な目的のための英語：明確な目的と特殊なニーズによって区別される集団または個人の学習者のための言語プログラム」のことで、日本で本格的に研究が始まったのは20世紀末です。例としては、パイロットが管制塔と交信する英語や医師と患者とのコミュニケーションのための英語などがあります。

私はESPのなかでも医療分野のESPを研究し、3校の国公立大医学科、3校の国公立大看護学科等の英語教育を行い、科研費補助金を得て医学英語教育教授法を研究するとともに、10冊を超える医療英語の教科書・数種のeラーニング教材を開発しました。そのために医療に必要な語彙・表現を研究するだけでなく、海外医療機関にも出かけ世界の医療文化の調査も続けて参りました。医療現場・国際学会で即戦力となる人材を育てるための英語教育を追究してきました。

そのような研究過程において、世界的に著名な医学者、国際学会で常時発表をしている医師からの協力を得て参りました。ESP教育は、専門家と英語教員との協力が不可欠です。医学のESP教育のために医学教育と英語教育の専門家で作られた「日本医学英語教育学会」の発足当初からのメンバーとして研究し、「日本医学英語検定」を他の学会員と立ち上げ、医学英語力の全国的なレベルアップをめざしています。

今までのESP研究の経験をもとにして、全国に先駆けて本学の英文学科以外の全学科でESP教育を行うことにし、音楽・心理・バイオサイエンス等に関連のある英語教育を進めています。ESPにより学生が専門分野に対する興味を深めかつ英語学習のモチベーションがあがることは先行研究で証明済みです。本学でESP教育の手法を充実させ、英語力をあげ、専門教育への架け橋にする努力をいたしております。

(共通英語教育研究センター教授)

<ゼミ紹介>

データ集めとその考察

松尾 歩

英文学科ではゼミが4年次の1年のみであったカリキュラムが改定され半年延長になりました。ゼミの期間が1年半となって、今年が2年目になります。今まで1年で20ページの卒論を仕上げるのに必死で、細かく指導することが難しかったのですが、この改定のおかげで余裕が出てきたのは言うまでもありません。私のゼミでは、特に子供の言語習得、バイリンガル児の言語を卒業研究のテーマにする学生が多いので、地域の保育園、小学校、インターナショナルスクールや英会話教室で調査を実施させていただくケースが多々見受けられます。学校から許可をいただくのに比較的時間を費やさなければならぬので、ゼミの期間が延長になったのは本当にありがたいことです。

ゼミでは、私の研究内容に興味を持つ学生が来てくれるのですが、私一人では手の届かないような研究分野について調査をしてくれる学生も多く、近年では「自閉症児の言語発達」、「数詞の習得」、「something と anything の習得の違い」、「兄弟が言語習得に与える影響」、「Phonics の導入について」など私のみではやり遂げることのできないような研究をする学生もいて、大変興味深い内容について指導できることが、楽しくて仕方ありません。

社会に出る前の学生が、子供達、保護者、学校の先生方との交流を通して社会に触れ、責任感のある、そして感謝の心を忘れない社会人に育ていく後ろ姿を少しでも支えることができたなら、といつも努力しています。そして卒論を仕上げた学生は、自分の子供が生まれた際には子供の母語発達を記録にとって私に報告してくれると言ってくれます。将来は被験者を集めるのに苦労しなくて良くなるかもしれない、と今から楽しみにしています。

(英文学科教授)



研究の一環として映画『Intern』を観に行った時のもの

古代の英知に学ぶ

飯 謙

わたしは総合文化学科で宗教学の専攻科目群に属します。狭義には旧約学を専攻しています。旧約聖書はキリスト教成立以前の古代ユダヤ人の生き方を綴った文書で、歴史、物語、法、詩歌などさまざまな文学形式を含んでいます。これが含む39の文書には「隣人愛」と総称される立場へと向かう大まかな流れが読み取れますが、それらがどのような思想的素材や経緯から形成されたのかにわたしの関心の一つがあります。古代ユダヤ人の思いには、明らかに古代エジプトやメソポタミア、バルシア、ギリシアなど大国からの影響と、同時にそれに対する抵抗心が認められます。これらが彼らの「こだわり」や「誇り」をうみ、固有の文化構築につながりました。

ゼミでは、それらさまざまな文化の起源を、宗教の歴史を学ぶ中でたどり、現代に至る道筋を整理しています。そこからさらに、今日の社会においてもつれにもつれた文明間、あるいは民族間の諸問題をほどいてゆく糸口がつかめるよう志しています。

この起源と変容を探求する宗教史の方法は、文学、文化、芸術、社会学等々多様な領域から取り入れ、また応用されるという相互性の中にあります。ゼミの参加者は、かなり根気を要する作業ですが、ゼミでの学修をもとに自身で問題を立て、卒業論文に取り組みます。課題は古代宗教や神話・民話のみならず時事問題にまで多岐にわたりますので、わたしも学生の皆さんから多くのことを学ばせてもらっています。それらの成果は卒論集にまとめ、各人の関心を分かち合えるよう努めています。

(総合文化学科教授)



<課外活動紹介>

[クラブ]

コーラス部

部長 人間科学部 心理・行動科学科 3年生

私たちコーラス部は部員数が10名と少数ですが部員同士の距離が近く、普段は和気あいあいと、練習が始まると真剣に活動しています。主に年に2回開催する演奏会や学内外からいただく依頼演奏に向けて日々練習しています。

昨年の夏は、他大学の合唱団と共にジョイントコンサートを開催し、普段歌っている女声合唱とは違う雰囲気の混声合唱を歌う経験をしました。冬には1年間の集大成である定期演奏会を開催しました。演奏会に向けいつもご指導いただいている技術顧問、ボイストレーナーの先生に加え、作曲家の先生にもご指導いただき本当に貴重な経験をしました。どの演奏会も同じメンバーで同じ舞台に立つことは一度きりです。多くのご縁に感謝し、楽しむことを大切にしています。また、愛校バザーや岡田山祭では模擬店や舞台発表、チャペルアワー出演など、学内でも活動しています。昨年は部の活動に対し大学クローバー賞をいただきました。

今年は創部60周年という節目の年を迎えます。神戸女学院大学の中でも長い歴史を持つコーラス部の部員であることを誇りに思います。今年も7月にはジョイントコンサート、12月には定期演奏会を開催いたします。私たちは仲間を募集しています。新入生はもちろん上回生も、経験者も未経験者も大歓迎です！部員は未経験者が多く、ほとんどが部の雰囲気を気に入り入部しています。音楽、歌は好きですか？是非コーラス部で楽しい女学院生活をくり送みましょう。



昨年7月のジョイントコンサート単独ステージ

[クラブ]

硬式テニス部

部長 人間科学部 心理・行動科学科 1年生

私たち硬式テニス部の主な活動は、9月に行われるリーグ戦に向けての練習です。

リーグ戦は、大きなイベントで、今までの練習成果を思う存分発揮できる大会です。試合に勝つために、部員が一丸となって精一杯戦います。試合に向けて合宿も行います。合宿では、いつも以上に練習を重ねるだけでなく、部員同士の交流をより深めあうことができます。リーグ戦という大きな大会で悔いの残らないよう、一生懸命練習しています。練習はハードですが、部員同士よきライバルとして、お互いに鼓舞しあっています。

リーグ戦の前に、他大学と練習試合を行います。練習試合は、試合の時と同じ緊張感があります。1日にたくさんの試合をするので、心身ともに疲れますが、リーグ戦本番の雰囲気を味わうことができるので、とてもいい経験になります。また、対戦相手の方から自分の欠点やその練習方法を教えていただけます。それらは私たちにとって非常に参考になり、部員の成長にもつながっています。他大学との交流は、次の試合までの課題を見つけられ、そのためにどんな練習をすればいいのかを考えることができます。

このように、私たちは様々な経験を通して、上達するために努力を積み重ねています。まだまだ未熟で、学んでいかなければならないことがたくさんあります。また、練習が苦しいこともあります。しかし、私たちはそれを乗り越えて、実力をつけるとともに、試合でも好成績を残していきたいと思えます。



1回生のメンバーと

学生の活動紹介

(コンクール受賞、学会発表など)

- 第41回イギリス・ロマン派学会全国大会にて発表。
(2015年10月17日)
大学院 文学研究科 3年生 (英文学専攻)
- 第9回 ベーテン音楽コンクール全国大会
ピアノ部門 大学・院生A 第4位
(2016年1月7日)
音楽学部 音楽学科 4年生 (ピアノ専攻)
- 第9回 ベーテン音楽コンクール全国大会
ピアノ部門 大学・院生A 第5位
(2016年1月7日)
大学院 音楽研究科 1年生 (ピアノ専攻)
- 第4回 みおつくし音楽祭
ピアノの部 一般の部A 大阪市長賞
(2016年1月9日)
音楽学部 音楽学科 4年生 (ピアノ専攻)
- KOBE 国際音楽コンクール C部門 優秀賞
(2016年1月10日)
大学院 音楽研究科 1年生 (ピアノ専攻)

中高部報告

2015年エンパワーメント・プログラム報告

2015年8月17日(月)から21日(金)、毎日9時から15時、VC 館トリニティホールにて、J2、J3、S1の39名を対象に、株式会社アイエスエイの企画による「女性のためのエンパワーメント・プログラム」が開催されました。これは、アメリカ東部の名門女子大生10名をリーダーとして招き、少人数グループに分かれて、英語で話し合い、発表をするプログラムです。

自分のライフマップを作成発表したり、将来の職業や、女性ロールモデルについて話し合ったり、サッカー、折り紙など多彩な自分のスキルを披露する機会もありました。

最終日は、まとめのグループ・プレゼンテーションで、神戸女学院大学英文学科の先生数名も参観にこられました。

発表後、修了証書をいただき、集合写真をとって、全プログラムが終了しました。期間中、女子大学生をホームステイさせてくださった参加者のご家庭のご協力に感謝申し上げます。

本年度はじめての開催でしたが、将来国際社会で活躍する女性に役立つ、語学力、思考力、発表力を磨くよい機会となりました。「英語を臆することなく使えた、自分を見つめなおして自信が持てた」と、参加生徒達の満足度は非常に高く、2学期以降の英語授業に積極的に取り組むという効果も見られました。本校のJ3からS1の年齢層、英語レベルにふさわしい効果的なプログラムとして、来年度も継続が決定しています。

(国際交流委員会)

MLC訪日旅行団受け入れ報告

西オーストラリア州の姉妹校 Methodist Ladies' College の訪日旅行団受け入れは、2年ぶりになります。日本語を学ぶ14～16歳の女生徒12名と、2名の引率教員は、9月26日に来日、28日の紹介礼拝では先生と生徒の日本語スピーチとスライドがありました。その後の2週間は、京都、奈良、姫路などへの日帰り遠足のほか、学校で特別授業やホストシスターの授業に参加したりして過ごしました。

特別授業は、音楽、書道、調理実習、美術、日本語、体育、化学、プラネタリウム、広島平和学習（近藤紘子先生講話）、J1、J3、S2の英語授業参加などで、放課後は、華道部や報徳学園で武道クラブ活動を見学しました。ご協力いただいた皆様方に深く感謝いたします。

今回は、前半と後半あわせて24のご家庭にホストをしていただきました。皆様快くお世話くださり、10月9日のさよならパーティでは、名残を惜しんで写真を撮り合う姿がみられました。本当に有難うございました。

ホストシスター以外の生徒達も控室を訪ねたり、直前の文化祭で発表した演奏を披露したりと積極的に交流しようとする姿勢が見られ、嬉しく思いました。

旅行団は10月10日に広島へ旅立ち、その後、無事帰国されました。今後も途切れることなく、両校の交流が続いていきますことを心から願っております。

(中高部訪日旅行団受け入れ委員会)

第9回全日本高校模擬国連大会報告

この大会には、これまでも2年、本校チーム（2人1組）が参加しています。本年度は、203チームのうち、本校を含む80チームが課題選考で選ばれ、10月には国が割り当てられました。本校はアルゼンチン代表です。

前日の金曜日放課後、S2とS1の出場生徒と一緒に東京へ出発しました。

11月14日土曜日、国連大学に9時集合、特別講演を含む開会式の後、午後に第一回目のセッションが始まりました。この大会のテーマ「移民」について、国連の討議形式にのっとり、各国の正式な英語スピーチの合間に、着席または非着席の日本語討議をはさみ、賛同国を募り、主張をすり合わせて決議案の下案を作成、提出しました。

翌日15日午前中には、前日の下案をさらに練り上げました。昼前に、3つの最終決議案がまとめられ、午後には、それらにさらに修正を加え、15時には、3つの修正決議案について、個別投票が行なわれました。その結果、本校主導の決議案も無事採択されました。

16時半からの閉会式では、討議において活躍した大使チームの表彰が行なわれ、優秀賞が本校を含む4チームに、最優秀賞が2チームに与えられました。積極的な交渉態度やリーダーシップの発揮が評価されたとのことでした。この6チームは、2016年5月、ニューヨークで開催される模擬国連国際大会に派遣されます。すべて英語になりますが、よく準備して、堂々と活躍してきてもらいたいと願っています。

(中高部教諭)

マロニエ賞報告

12月25日に兵庫県公館でマロニエ賞の授賞式がありました。受賞生徒はS3の1名、S2の1名、S2の5名からなるチーム Prime、S1の1名でした。順に受賞内容を紹介します。

S3の1名は、S1のときから日本倫理哲学グランプリに参加し、1度目は銅賞、2度目は銀賞を獲得しました。国際哲学オリンピック選考会においては、1度目は奨励賞、2度目は第1位に相当するグランプリを獲得し、今年5月にエストニアで開催された国際哲学オリンピックに出場しました。

S2の1名は、数学オリンピック国内予選で女子ベスト4名のうち1名に選出され、今年4月にベラルーシのミンスクで開催された2015ヨーロッパ女子数学オリンピックベラルーシ大会に日本代表として出場し、銅メダルを受賞しています。

また、S2の1名はS2の4名とともにチーム Prime というチーム名で、9月20日に東京で開催された数学甲子園2015決勝大会に出場し、優勝しました。女子だけのチームとしては初めての決勝進出、優勝でした。

S1の1名は、総務省・文部科学省講演事業の第31回「全国年賀はがきコンクール」において、2月15日に、最優秀賞にあたる「総務大臣賞」を受賞しました。今回、色々な年齢層の方からの12,045の応募作品から最優秀に選出されました。

(中高部教諭)

冬の修養会 釜ヶ崎訪問

高等学部 2年生

私は今まで、釜ヶ崎で暮らす人々が直面する問題に向き合わないようになってきました。礼拝などで話を聞いてきたこともあって、普通の人よりも自分は向き合っていると思ひ込み、テレビなどで関連する話題が出ているのを見ても「ああ、知ってる知ってる」と知ったかぶりをして、深く踏み込まないようにしてきたのです。しかし、私ももうすぐS3という時期になり、見て見ぬふりはできないと感じ、参加することにしました。

私は昔から今津で『ビッグイシュー』を販売していたり、武庫川で野宿している方達を見ていたので初めはそんなに衝撃を受けなかったのですが、炊き出しの列に何度も並んで他の方達に注意されている方がいたことには驚かされました。「冷めたおにぎりのために寒いなかずっと待っているのか」、「ここは過酷な暮らしを強いられている人々の町なんだ」と改めて感じました。現実には直面した私は、手渡す時に列に並ぶ方々の目をまっすぐ見れず、後からとても後悔しました。少しでも浅ましいと感じてしまった自分の心が汚く感じて、とても恥ずかしかったです。

炊き出しの後、釜ヶ崎で労働者の方々の為に働いている先生のお話を聞く時間を持ちました。釜ヶ崎で暮らす方々の多くは都合のいいときだけ雇われ、仕事が無くなれば放っておかれるという境遇の中で、主に建設現場などで私達の生活を支えてきた方達なのだそうです。自分達の生活の中にある影の部分と向き合うのは辛いことですが、私達には知る義務があるのだと思います。

<先輩からのメッセージ>

すべての出合いを学びに

北川 実萌
(中高部卒業)

私は米国で大学院生をしながら日本で SoHub という団体の代表を務めています。SoHub は地域課題や社会問題の解決を目指してデザインワークショップやプロジェクトに取り組む団体です。

中高の時から発展途上国での社会問題に興味があったので大学では機械工学を専攻し適正技術開発を学びました。中南米のコミュニティと活動するうちに私の心の中では多くの葛藤が生まれました。「私の活動は本当にこの人たちの幸せに繋がっているのか」「日本でも悲惨な課題があるのに何故それには関わらず中南米にいるのか、偽善ではないか」このような思いは、私に原点回帰を促しました。私の大切な原点の一つにSで参加した長島愛生園訪問があります。虚栄心にまみれていた当時の私は、長島愛生園で静かに暮らす人たちの話を聞き自分の「すること」より「あり方」の価値に気づかされました。これは現在の活動でも何度も感じますし、人に寄り添い人生活を聞くことが私に多くの成長を与えてきたと実感しています。

生きている間に私たちはたくさんの人とすれ違いますが、意識しなければその多くと人生を交えることはありません。愚かだった私は、過去に人生を交える機会を自分から拒否したこともあります。しかし結局、私たちは人を通してしか大切なことを学べないのです。皆さんの日々が存在する、人に寄り添う機会を大切にしてください。そして多くの人と出会うため、挑戦を重ねてください。



団体活動先の韓国デジョンにて（筆者左から2人目）

それぞれのプロに向かって

在間 梓
(中高部卒業)

プロってカッコいいですね。私は12年間こどもの外科医として働き、3年前からは大学病院で主に研修医の教育に従事しています。私自身もプロになりたいし、プロを育てたいと思いながら日々楽しく奮闘しています。

でもプロって何でしょう？医師としてのプロ、プロのお寿司やさん、掃除のプロ…様々です。私は自分の仕事を通して相手を幸せにする人、と考えています。そして自分も幸せになる人。

ではプロになるためにはどうしたらよいでしょうか？知識や技術を身に付けることは必須ですね。もうひとつとても大切なこと。それは多様な価値観を知ることでないかと思います。幸せは人それぞれ違います。ですから身に付けたものを発揮する時、どのように発揮すれば相手の幸せに繋がるのかを考えること、相手の価値観を尊重することが大切になります。そして自分の人生でも、自分に多様な価値観があれば様々な場面で多彩なたくさんの幸せを見つけることができます。

私は医師となり患者さんと向き合う中でその大切さを感じ、教育担当となつてますますその思いを深くしています。この大切さになぜ出会えたのか。それは神戸女学院での毎日でした。神戸女学院では生徒や物事のあり方を粹にはめず、とても伸びやかに自然に個々が尊重され生かされます。一人ひとりの中で育まれる豊かな個性を生かして、それぞれの素敵なプロになられることを心から応援しています。母校への感謝をこめて。



研修医、医学生と

第50回中高部長賞 第31回文化・スポーツ賞

今年度のクラブ部長賞表彰式は2015年12月18日(金)の2学期終業日に行われ、Jは2クラブ、Sが3クラブの計5クラブが受賞されました。受賞クラブには表彰状と盾、副賞の5千円が贈呈されました。

文化・スポーツ賞表彰式は2016年1月28日(木)に行われ、受賞者には中高部部长林先生から表彰状とメダルが贈呈されました。文化・スポーツ賞は、学校代表として各大会やコンクールへ参加し、顕著な成績をおさめた団体、個人に授与されるものです。賞の基準は西宮・阪神地区で第1位、兵庫県・近畿・全国で第3位以内とするものであり、選考委員で審議し受賞者をそれぞれ決定しました。

クラブ部長賞、文化・スポーツ賞は、生徒のクラブ活動や、学校生活での活性化を願い、生徒の努力を称えることが目的であります。来年度もたくさんの受賞者が選出されることを願っています。

施設課の方々には表彰式にふさわしい会場を設営していただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

第50回中高部長賞

J ギター部、J バスケットボール部
S 演劇研究部、S コーラス部、S 軽音楽部

個人情報保護のため、
61ページ目から
62ページ目左段は
一部削除しています。

第31回文化賞 (37名)

☆国際哲学オリンピック 選考会日本倫理哲学グランプリ グランプリ (全国1位)

☆ITC カウンسل No.3 第4回高校生スピーチコンテスト 英語の部優勝

☆ITC カウンسل No.3 第4回高校生スピーチコンテスト 日本語の部優勝

☆日本写真協会主催第40回2015 JPS 展 (応募6900点) 優秀賞 (全国2位相当、最優秀賞1名、優秀賞9名)

☆2015ヨーロッパ女子数学オリンピック (EGMO) ベラルーシ大会 日本代表 銅メダル

☆第7回日本地学オリンピック (「グランプリ地球にわくわく2015」) 日本地球惑星科学連合賞

☆数学甲子園2015 (第8回全国数学選手権大会) 本選 優勝 Prime チーム

☆第48回私学の書展 特選呉竹賞

☆第26回上野学園・ゴードンストーン英語コンテスト 優勝

※ゴードンストーンインターナショナルサマースクール (スコットランド) へ派遣されました

☆神戸日米協会第22回高校生英語暗唱大会 第2位

☆阪神 E. S. S. ユニオン英語スピーチコンテスト 第1位

☆第11回英語スピーチコンテスト 第1位

☆平成27年度阪神 E. S. S. ユニオンシナリオリーディングコンテスト 第1位

☆第九回全日本高校模擬国連大会 優秀賞
 (ニューヨークで行われる高校模擬国連国際大会
 へ出場します)

☆第11回高校生英語スピーチコンテスト 奨励賞

☆2015年度近畿地区春季中学・高校ディベート交流
 大会 第2位

☆数学・理科甲子園2015兵庫県予選 第3位

☆税の書道 西宮・宝塚租税教育推進協議会賞

☆西宮納税貯蓄組合連合会会長賞

☆中学生の税に関する作文 西宮納税貯蓄組合連合
 会会長賞

☆ JICA 国際協力中学生高校生エッセイコンテスト
 優秀賞 (全国2位相当)

第31回スポーツ賞 (20名)

☆第2回兵庫県中学校冬季テニス大会団体戦
 第3位

☆平成27年度第59回兵庫県中学校総合体育大会テニ
 ス競技団体戦 第3位

☆平成27年度兵庫県中学校秋季テニス大会 学校対
 抗の部 第3位

☆第3回兵庫県中学校冬季テニス大会団体戦
 第3位

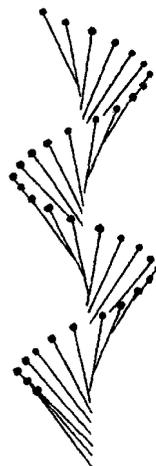
(中高部教諭)

2016年度中学部入試結果報告

日程：2016年1月16日(土)・18日(月)

募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	手続完了者数
135	255	253	160	146

(中高部事務室)



<課外活動紹介>

[クラブ]

Jギター部

中学部 2年生

わたしたちJギター部では、年に5回ある舞台にむけて、クラシックからアニメソングまで、さまざまなジャンルの曲にチャレンジしながら日々練習を積み重ねています。

ギターにはいろいろな表現の仕方があり、仲間と音を合わせる楽しみもあります。和気あいあいとした雰囲気の中、ひとつの舞台にむけて作り上げていく喜びも格別です。そしてこのたび、2年連続中高部部長賞を受賞することができ、ますます素敵なハーモニーを奏でられるよう、練習に励んでいきたいと考えています。

[クラブ]

J書道部

中学部 2年生

J書道部は毎週火曜日と金曜日に書道室で活動しています。顧問の小島先生にご指導していただきながら、年に6回ある大会に向けて練習しています。

夏の合宿では、文化祭で展示する大きな作品をたった3日間だけで完成させます。書く字数も多く、集中力を切らさないように1枚書ききるのは大変ですが、作品が完成した時の達成感はとても大きいです。

これからも大会で良い結果を残せるよう、日々の練習を頑張っていきたいと思います。

[クラブ]

Sブラスバンド部

高等学部 2年生

Sブラスバンド部は、創部11年のまだ新しいクラブです。年に7回ほどある舞台に向けて、日々練習に励んでいます。近年は活動範囲が広がり、校外の音楽会にも参加するようになりました。

楽器未経験者が大半ですが、先輩に教わりながら、部員全員仲良く楽しく活動しています。舞台ごとに選曲するため、練習時間も少なく、大変なことも多いですが、合奏で全員が一体となる感覚は何ものにも代え難い素晴らしいものです。この合奏とフレンドリーさが当クラブの最大の魅力だと感じています。

[クラブ]

S演劇研究部

高等学部 1年生

充実した日々

私達S演劇研究部は、発声や筋トレ等の基礎練習に加え、春のコンクール、バザー、文化祭、秋のコンクール、聖なる集いの公演に向けて活動しています。部員全員で協力し合って台本、演出、裏方構成を考え、一つの舞台を創り上げます。限られた時間と闘いながら舞台を完成させる上で苦勞することも多々ありますが、その分やりがいもあり、充実したクラブ生活を送っています。昨年の文化祭では文芸会賞をいただきました。

これからも部員一同、精一杯頑張っていきたいので、応援よろしくをお願いします。

〈学院日誌〉

1月8日(金)	中高部始業日	2月17日(水)	中高部教員会議
1月12日(火)	中高部教員会議	2月24日(水)	理事会 中高部臨時教員会議
1月15日(金)	教授会	3月1日(火)	高等学部卒業式
1月16日(土)・17日(日)	大学入試センター試験	3月2日(水)	中高部教員会議
1月16日(土)・18日(月)	中学部入学試験	3月4日(金)	教授会
1月27日(水)	理事会 中高部教員会議	3月7日(月)	文学部・人間科学部一般入学試験 (後期日程)
1月28日(木)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期A日程)	3月17日(木)	大学卒業式、大学院修士学位記授 与式 中高部教員会議
1月28日(木)～30日(土)	音楽学部一般入学試験(前期A日 程)	3月18日(金)	中学部卒業式、中高部終業式
1月29日(金)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期B日程)	3月21日(月・祝)	オープンキャンパス
2月3日(水)	中高部教員会議	3月23日(水)	理事会 臨時評議員会 臨時理事会
2月12日(金)	教授会		
2月16日(火)	文学部・人間科学部一般入学試験 (前期C・D日程)		

目

リベラルアーツ教育の一層の充実を目指して…1
KCC だより ……3
図書館本館に貴重書庫設置……5
「神戸女学院古本募金」を開始しました……5
クリスマス報告……6
2016年度年間標語……8
退職のことば……9
史料室の窓・3つの記念式……14
人事・慶弔……15
秋季公開講座報告と春季公開講座告知……15
新刊・CD 紹介 ……16
その他の新刊一覧……18
キャンパスお気に入りの場所……19
大学報告
高大連携授業報告……20
第40回神戸女学院大学英語英文学会 (KCSSES) 大会報告…21
広東外語外貿大学式典 AUPF 参加報告 ……21
地域創りリーダー養成プログラム 食堂メニュー提供について…22
フィリピンの子どもたちとランウェイの上で夢を描く…22
2015年度音楽学部定期演奏会報告(11/29)…23
第7回舞踊専攻卒業公演……24
2015年度文学部卒業論文題名……25
2015年度音楽学部卒業演奏会演奏曲目……37
2015年度人間科学部卒業論文題名……39
2015年度文学研究科博士論文題名……43

次

2015年度音楽研究科修了公開試験曲目……44
2015年度人間科学研究科博士前期課程・修士論文題名…45
先輩からのメッセージ……46
2016年度大学入試結果中間報告(2/23現在)…47
派遣留学報告……48
認定留学報告……49
2016年度夏期語学研修参加者募集……50
研究所活動報告……51
女性学インスティテュート活動報告……53
私の研究……54
ゼミ紹介……55
課外活動紹介……56
学生の活動紹介……57
中高部報告
2015年エンパワーメント・プログラム報告…57
MLC 訪日旅行団受け入れ報告 ……58
第9回全日本高校模擬国連大会報告……58
マロニエ賞報告……59
冬の修養会 釜ヶ崎訪問……59
先輩からのメッセージ……60
第50回中高部長賞、第31回文化・スポーツ賞…61
2016年度中学部入試結果報告……62
課外活動紹介……63
学院日誌……64